

長岡京右京一条四坊十三・十四町跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京右京一条四坊十三・十四町跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様に広く公開し活用いただけるよう努めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。平成14年度の第2冊目として、このたび3.3.5中山石見線道路新設工事に伴います長岡京跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に厚くお礼ならびに感謝を申し上げる次第です。

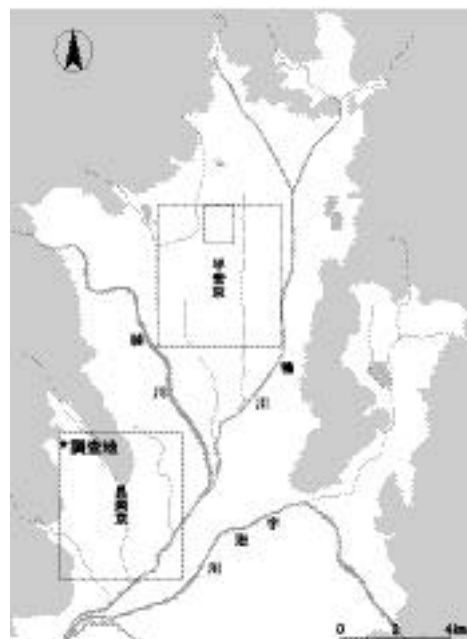
平成15年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京右京一条四坊十三・十四町跡
長岡京右京第746次（7ANUDC-2地区）
- 2 調査地点所在地 京都市西京区大原野石見町他地内
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 榊本頼兼
- 4 調査期間 2002年8月8日～2003年2月28日
- 5 調査面積 約4,800㎡
- 6 調査担当職員 百瀬正恒・網 伸也・永田宗秀・本 弥八郎・南出俊彦
- 7 使用地図 図1は、国土地理院発行の1：50,000地形図「京都西南部」をベースに作成した。
図2は、京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「石見」「栗生」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度（座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した）
- 10 遺構番号 1・2区に分け、区ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 11 遺物番号 土器・土製品・石製品に分けて番号を付し、写真番号も同一とした。
- 12 掲載写真 村井伸也・幸明綾子・担当調査員
- 13 作成担当職員 百瀬正恒・網 伸也
- 14 執筆分担 百瀬：1～3、5-(1)・(2)
網：4、5-(3)



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 調査地点の位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
3 . 遺 構	5
(1) 遺構の概要	5
(2) 1 区の層序と遺構	6
(3) 2 区の層序と遺構	12
4 . 遺 物	19
(1) 遺物の概要	19
(2) 1 区の出土遺物	19
(3) 2 区の出土遺物	20
5 . ま と め	35
(1) 中世の集落の成立と耕作地化	35
(2) 長岡京期の遺構	37
(3) 出土遺物について	37

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 区上層遺構平面図 (1 : 400)
図版 2	遺構	1 区下層遺構平面図 (1 : 400)
図版 3	遺構	1 区西拡張区遺構実測図 (1 : 200)
図版 4	遺構	1 区南土層断面図 (1 : 100)
図版 5	遺構	2 区中世から近世遺構平面図 (1 : 400)
図版 6	遺構	2 区长岡京期遺構平面図 (1 : 400)
図版 7	遺構	2 区SD543・SK563遺物出土状況実測図 (1 : 50)
図版 8	遺構	1 1 区北 中世から近世遺構全景 (北から) 2 1 区北 縄文時代から弥生時代遺構全景 (北東から)
図版 9	遺構	1 1 区北 縄文時代から弥生時代遺構細部 (東から) 2 1 区北 縄文時代から弥生時代遺構断面 (南東から)

- 図版10 遺構 1 1区南 中世から近世遺構全景（北から）
 2 1区南 SD205A（北東から）
 3 1区南 SD205B 縄文時代から弥生時代（東から）
- 図版11 遺構 1 1区西拡張区 中世上層遺構全景（北東から）
 2 1区西拡張区 中世下層遺構全景（北東から）
 3 1区西拡張区 中世上層水田畦畔・水路（北東から）
- 図版12 遺構 1 1区北拡張区 SD542 古墳時代前期（東から）
 2 1区北 SD542南肩部 古墳時代前期（東から）
 3 1区北拡張区 SD542 古墳時代前期（北から）
- 図版13 遺構 1 2区 中世から近世遺構全景（南東から）
 2 2区 中世から近世遺構全景（北から）
- 図版14 遺構 1 2区 中世遺構全景（南から）
 2 2区 中世遺構全景（東から）
- 図版15 遺構 1 2区 SK472上層 中世（東から）
 2 2区 SK472下層 中世（東から）
 3 2区 SK37 中世（西から）
 4 2区 SK486 中世（東から）
 5 2区 SK486石敷とその下層 中世（南から）
- 図版16 遺構 1 2区 長岡京期遺構全景（北から）
 2 2区 長岡京期遺構全景（南西から）
- 図版17 遺構 1 2区 一条条間南小路全景 長岡宮を望む（西から）
 2 2区 一条条間南小路全景 西京極大路推定地を望む（東から）
- 図版18 遺構 1 2区 SD552・553 長岡京期（西から）
 2 2区 SK567 長岡京期（北東から）
- 図版19 遺構 1 2区 SD543（北東から）
 2 2区 SD543遺物出土状況（北から）
 3 2区 SK563遺物出土状況（北から）
 4 2区 SK563遺物出土状況（北から）
- 図版20 遺構 1 2区 SD600 弥生時代中期末から古墳時代前期（北西から）
 2 2区 SD568 飛鳥時代（西から）
 3 2区 SD600弥生時代後期壺出土状況（北西から）
- 図版21 遺構 1 2区 西壁断割り断面 西京極大路推定地を望む（東から）
 2 2区 西壁断割り断面（南東から）
- 図版22 遺物 2区中世遺構出土土器
- 図版23 遺物 2区SK563出土土器

- 図版24 遺物 2区SD543出土土器
- 図版25 遺物 1 2区出土土馬
2 2区出土ミニチュア土器
- 図版26 遺物 2区SD600出土土器
- 図版27 遺物 1 2区出土刻み目突帯文土器深鉢
2 刻み目突帯文土器
3 1区出土弥生土器壺
4 1区出土石鏃・小型石棒・石包丁

挿 図 目 次

図1	長岡京と調査地点図 京都西南部 (1:50,000)	1
図2	調査位置図 (1:5,000)	2
図3	調査区配置図 (1:2,000)	3
図4	南拡張区平面図 (1:200)	6
図5	1区南SD205A平面図 (1:300)	7
図6	1区北 縄文時代から弥生時代遺構平面図 (1:200)	8
図7	2区中世建物平面図 (1:150)	13
図8	2区SK472実測図 (1:80)	14
図9	SK37・486・428・430実測図 (1:30)	15
図10	2区条坊側溝SD532・533断面図 Y=-28,942.4mライン (1:40)	16
図11	2区SK526平面図 (1:20)	17
図12	1・2区出土縄文時代晩期から弥生時代前期遺物実測図	20
図13	2区出土中世遺物実測図 (1:4)	22
図14	2区SK563出土遺物実測図 (1:4)	23
図15	2区SK563・567出土遺物実測図 (1:4)	24
図16	2区SD543出土遺物実測図 (1:4、115のみ1:6)	25
図17	2区SK563・SD543出土遺物実測図 (1:4)	27
図18	2区出土ミニチュア土器・土馬実測図 (1:2)	28
図19	2区SD600出土遺物実測図 (1:4)	33
図20	1区検出の耕作溝と水田畦畔 (1:1,000)	36

挿図写真目次

写真 1	調査現場から長岡宮方面を望む	3
写真 2	芝古墳群 1 号墳 前方後円墳の後円部現状	4
写真 3	石見城西堀	4
写真 4	西拡張区中央畦畔SX406 (東から)	10
写真 5	西拡張区南畦畔SX474 (東から)	10

表目次

表 1	遺構概要表	5
表 2	遺物概要表	19
表 3	長岡京期主要遺構出土遺物破片数	29

長岡京右京一条四坊十三・十四町跡

1. 調査経過

調査は、京都市建設局街路部街路建設課による、中山石見線建設に係る事前調査として実施した。地点は京都市西京区大原野石見町他地内で、洛西ニュータウンを貫く中央南北道路の南延長部の南端に相当（路線幅25m）し、ニュータウンから約1km離れている。

調査に先行して、2001年11月から2002年3月まで試掘調査を行い、縄文時代から中世まで、各時代の遺構が発見されたため、2002年8月8日から2003年2月28日まで発掘調査を実施した。

調査区は石見地区を東西に走る道路を境に南北に別れているため、南を1区、北を2区として実施した。調査前の現状は、1区は周囲の水田に比べて、1.0～2.0m程の盛土がなされ、2区は

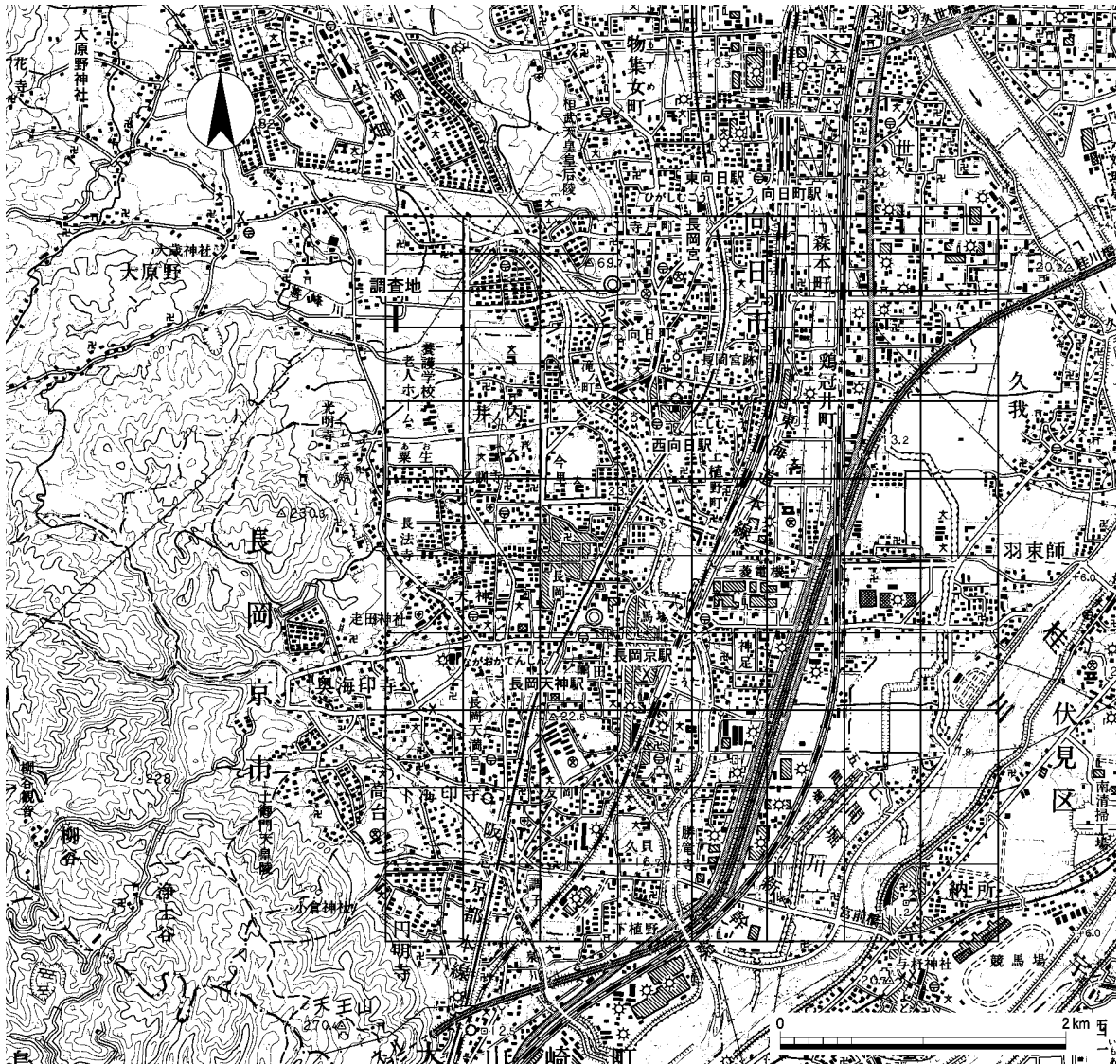


図1 長岡京と調査地点図 京都西南部（1：50,000）

耕作中の水田と、宅地化に伴い盛土が行われた部分とに分かれていた。

1区では当初、東西幅20m、南北幅90mを基本としてトレンチを設定したが、調査予定地内に用水路があり、これを境に1区南と北に分けて重機で盛土層の排土を開始した。しばらくすると盛土の下層で通常存在する旧耕作土層や床土層が存在しないことがわかり、同様の状況はトレンチ全域に広がっていた。その後、東壁や西壁の一部では旧耕作土・床土など本来の土層が確認されたため、次のような工事が調査に先行して行われたと判断した。

1. 水田の買収後に耕作土・床土層など、平均して0.7mの掘削を行い、外部に搬出する。ただし、敷地の境界部分、西側と東側の約幅2mだけは掘削を行わない。

2. 他地域から工事に伴う残土を搬入し、盛土する。

このように1区の当初トレンチでは遺構の残りが悪いために、事前工事が行われていない部分の敷地西と北西部に、西拡張区・北拡張区として補足調査用のトレンチを2箇所設けた。また、1区の南側でも、流路の南肩を確認するために南拡張区を設けた。

2区として設定した道路北側の調査区では、耕作中の水田があり、刈り取りを待って発掘調査を行うことになった。このため、10月初旬に稲穂が色づき、刈り取りが終了した10月7日から重機掘削に入った。当初、東西幅21m、南北幅80mを基本に、長方形のトレンチとしたが、南と北で拡張した。

なお、遺構番号は拡張区も含めて個別トレンチごとに付けたが、この報告にあたり1区と2区

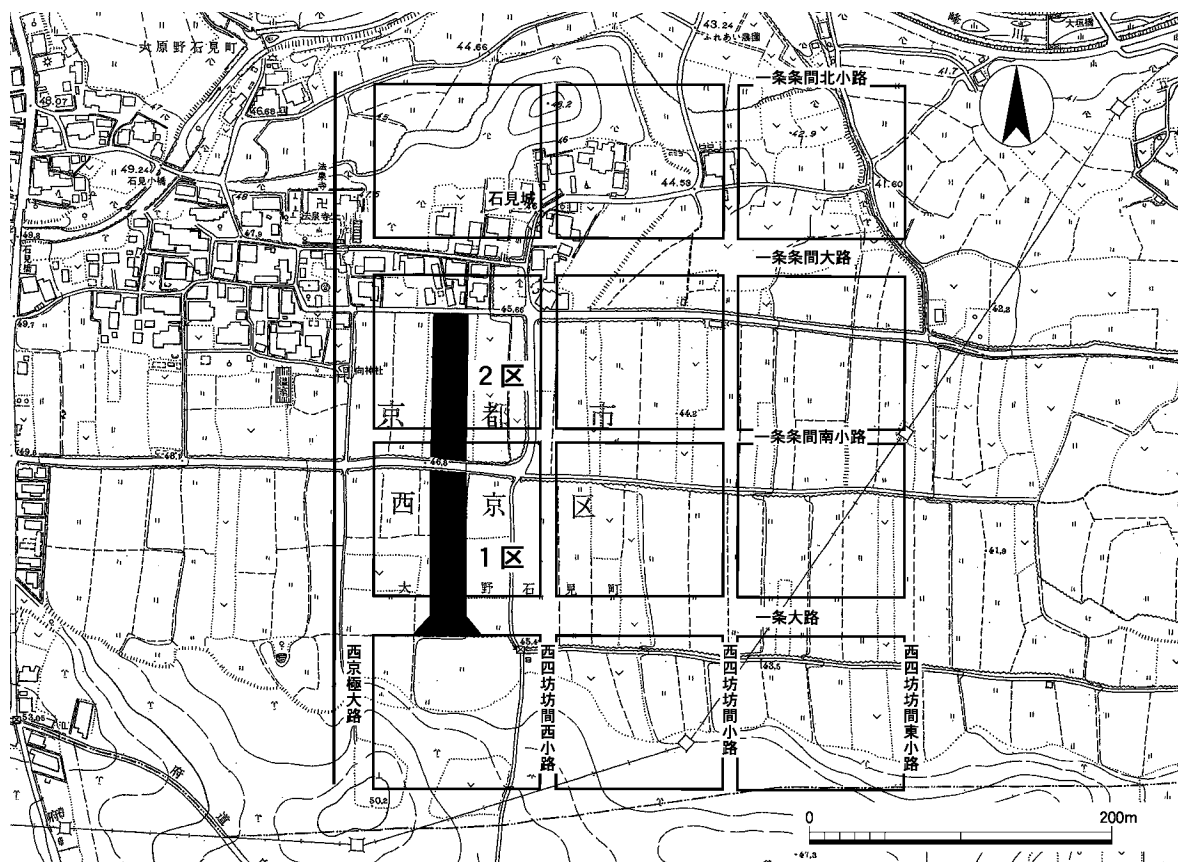


図2 調査位置図(1:5,000)

に分けて通し番号を付した。そのために、1区北は当初のまま、1区南では200番プラス、1区西拡張区では300番プラス、1区北拡張区では500番プラスした。2区は調査時のものを使用した。中世の建物と柵列は別にSB01～05、SC01～04、長岡京期の柵列はSC10とした。

なお、調査終了間際の2月1日に現地説明会を行い、約150人が参加した。

2. 調査地点の位置と環境

(1) 位置と環境

今回の調査地点は、長岡京右京一条四坊十三・十四町にあたり、数十m西に西京極大路が推定され、京の北西部に位置する。また、芝古墳群（京都市遺跡地図995番）を構成する円墳2基が調査地内の水田にドットされている¹⁾が、これは地点を間違えたものと推察される。また、北150mには石見城跡（998番）がある。

周辺での調査成果をみると、旧石器の遺構は確認できていないが、遺物が調査地点の北東300m地点で採集されている。²⁾約1km離れた小畑川の左岸には大枝遺跡があり、ナイフ型石器などが発見されており、遺跡の分布地点がさらに広がる可能性もある。

縄文時代の遺跡には上里遺跡があり、土器が採集されている。また、東850m地点では縄文時代後期の遺構が検出されている。³⁾

弥生時代の遺跡は、広い範囲に広がっているが、建物跡など具体的な遺構は検出されていない。

このような状況の中で遺跡が広範囲に展開するのは古墳時代になってからである。調査地の南には前方後円墳・円墳・方墳など多様な墳形で構成される芝古墳群がある。この古墳群は9基が京都市、5基が南接する長岡京市に所在する。1号墳はこの古墳群で唯一確認されている全長50mの前方後円墳で、竹藪内に残る。後円部や前方部などを土取りで大きく破壊されているが、断面からは石材は見つからないことから、横穴式石室の可能性は低いとみられ、木棺直葬かと推定される。

古代の遺跡は現状では散布地が中心で目立つものはない。なお、当地における条里の施工時期は明確でないが、乙訓郡条里では十条七・八里に相当する。しかし、石見では正方位をする郡の統一方位に対して北で西に3度振れた地割

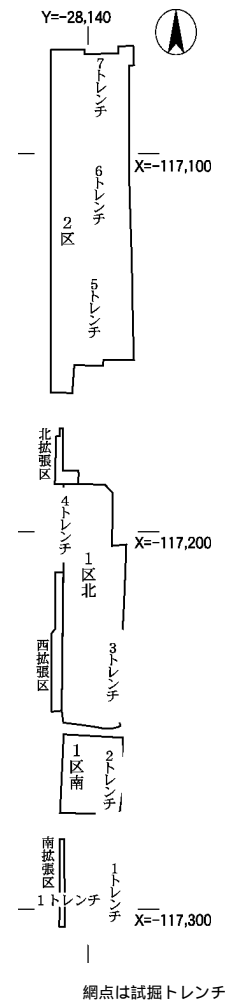


図3 調査区配置図 (1:2,000)



写真1 調査現場から長岡宮方面を望む



写真2 芝古墳群1号墳 前方後円墳の後円部現状



写真3 石見城西堀

が現存している。この範囲は南北2坪分で、東は小畑川右岸の氾濫源から始まり、西に約6坪分が確認できる。この地域だけ方向線がずれることの統一的理解は現状では困難であるが、遅れて開発された地域の可能性もある。ここではこの振れる条里を「石見条里」と仮称して説明していく。

中世前期の遺跡は調査前までは確認されていなかったが、室町時代後期には、石見城⁴⁾がある。第二次世界大戦時には食糧増産のために開墾されたとのことであるが、現在は再び真竹と破竹の林となり、城を一望することはできないが、中に入ると土塁や堀など、よく旧状を伝えている。北側と東側は善峰川の氾濫源で区画されるが、南と西の境界は明確ではない。出入りのある北側のラインをみると複数の曲輪で形成されている可能性もある。

「細川澄元書状」によると、西岡灰方の土豪として小野氏があり、関係した城郭であると考えられている。しかし、資料は少ないので、今後の調査が期待される。近年まで乙訓郡には多数の平地居館が現存していたが、この城は中でも最も保存状態の良い城である。

調査地の周囲には水田が広がっているが、東には長岡宮が所在する向日丘陵が間近に見え、西には善峰寺がある西山が南北に峰を連ね、西北には老ノ坂峠や愛宕山を望むことができる。また、南には孟宗竹が繁茂する低丘陵があり、光明寺や長岡京市市街地への視界を遮っている。このような京都郊外の景観の中で発掘調査を開始し、これから述べるように大きな成果を上げることができた。

3. 遺 構

(1) 遺構の概要

予定地の南北中央に走る東西道路により調査地が分断されているため、南側を1区、北側を2区として実施した。また、1区は都合3回の拡張を行い、遺構の把握に努めたため、トレンチが変則的な形になった。そのため拡張部分を次のように呼び分ける。南を南拡張区、西を西拡張区、北へ広げた部分を北拡張区とする。また、1区の当初のトレンチも南部に東西方向の用水路があり、南と北に分断され、南を1区南、北を1区北と呼ぶこととする。

1区は調査区の大半が前章で述べたように大規模に掘削されており、検出された遺構は少ない。1区南・1区北・西拡張区・北拡張区では、中世から近世の耕作に係る小溝を多数検出し、西拡張区の成果からは、13世紀後半から現在と同一の畦畔が継続してきたことがわかった。

2区では、北部で平安時代後期から鎌倉時代の集落を検出した。これまで周囲では当該期の遺跡は未確認であったが、現集落に接して中世集落が存在することがわかった。集落は13世紀中葉で廃絶し、現在に続く景観がこの時点で成立したことがわかる。

長岡京期の遺構には、一条条間南小路の両側溝、溝・土壌などがある。京都市に關係した長岡京右京一条四坊では調査例がほとんど無いが、その南部、二条三坊・四坊では比較的多くの調査が長岡京市によって行われてきた。しかし、良好な条坊遺構の確認例は少なかった。今回の条坊に係るデータは、長岡京右京北部における都城の施工を考える上で重要な資料となった。

1区南と南拡張区では縄文時代後期から弥生時代前期の流路を検出した。西から東に流れる河川で、深さは0.6m前後と浅い。埋土からは弥生時代前期の遺物1個体(図12-162)がまとまっ

表1 遺構概要表

地 区	検出面	時 期	主 要 遺 構
南拡張区	第1面	不明	流路A~C
1区南	第1面	中世~近代	SG201、SD202・203、SE204
	第2・3面	縄文後期~弥生前期	SD205
1区北	第1面	中世~近代	SD6~31、SK24、P10・21・34~39
	第2面	古墳前期	SD542
	第3面	縄文後期~弥生前期	柱穴、包含層
西拡張区	第1a~2b面	中世	SD308~474
	第3面	縄文晩期~弥生前期	柱穴
北拡張区	第1面	中世~近世	小溝
	第2面	古墳前期	SD542
2区	第1面	中世~近代	SK27、SD151・206・208・209・220・222・223・225・227、SB01~05、SC01~04、SK472・37・486・428・430
	第2面	長岡京期	SD532・533、SK563・567、SD543・544、SK530、SD552・553、SC10、SK542、
	第3面	弥生中期~古墳	SD600

て出土したが、全体としては少量であった。1区北と北拡張区では古墳時代前期の流路を検出した。当該地点では南肩の検出だけで、北肩は確認できなかったが、最大規模では後述する2区の流路まで広がることが予想される。また、1区の中央部から西拡張区にかけて縄文時代から弥生時代の包含層や柱穴を検出した。土器は細片で年代を特定できない。

また、2区では大規模な流路を確認した。下層からは弥生時代中期末から古墳時代前期の遺物が出土し、上層からは6世紀の須恵器(図19-157)が出土し、最終的な埋没時期を知ることができ、当該地の平坦な地形が成立した契機を知ることができる。

(2) 1区の層序と遺構(図4~6、図版1~4・8~12)

以下、各トレンチごとに分け、遺構の時代が新しいものから順次概説する。

縄文時代後期から近世までにわたる、各時代の遺構・遺物を確認している。南拡張区では1面、北拡張区では2面、1区南・1区北・西拡張区では3面で遺構の検出を行った。

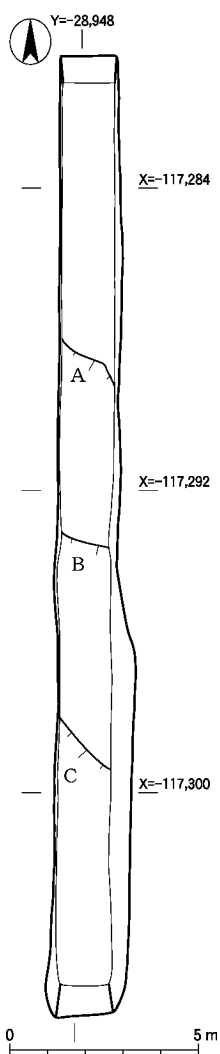


図4 南拡張区遺構
平面図(1:200)

1) 南拡張区

1区南で検出したSD205の南肩を検出するために設定したトレンチで、幅1.7~2.0m、南北に25.5mの規模とした。試掘調査の1トレンチ(図3)で近代の池が確認されていたため、この土層までを重機で掘削し、流路の南肩を確認することを主目的に調査を行った。

基本土層は、北端のX=-117,283m地点では、1層 - 盛土層、2層 - 10YR 4/2 灰黄褐色砂泥層、3層 - 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥層、4層 - 10YR3/1 黒褐色シルト層である。

検出した遺構には、流路肩がA~Cと3ラインある。A・Cは北西から南東方向で、Bはほぼ東西方向である。埋土はCは砂礫が主体であるが、A・Bは暗褐色泥砂層が主体である。

このトレンチでは、SD205に直接対応する南肩は検出できなかったが、丘陵の北裾までが流路と考えられ、方向や規模を変えながら、継続してきたものと思われる。

2) 1区南

現代の盛土層を掘削したところ、1区北と同様に旧耕作土層の上面から測って0.7m程が掘削され、削平されていることがわかった。ただ、西壁の周辺では耕作土層が部分的に残り、中世から近世に関係した遺構の全面的な破壊は免れていた。

西壁断面のX=-117,272m地点における基本土層は、1層 - 盛土層、2層 - 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥層(SG201埋土)、3層 - 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥

層（SG201埋土）、4層 - 5Y5/2 灰オリーブ色砂泥層（SD205埋土）、5層 - 2.5Y5/3 黄褐色砂泥層（SD205埋土）、6層 - 5Y3/1 オリーブ黒色砂泥層（SD205埋土）、7層 - 5Y2/1 黒色泥土層（SD205埋土）、8層 - 5Y2/1 黒色泥土層（SD205埋土）、9層 - 2.5GY5/1 オリーブ灰色砂礫層（SD205埋土）であった。

近世から近代の遺構

SD202 西で北に20度ほど傾く暗渠溝で、掘形は幅が0.3m、深さ0.1mで、掘形の内部に竹の枝を敷き、その上に節を抜いた真竹を据えている。

SE204 西壁の南部で径0.9m、深さ1.0mの素掘り井戸を検出した。早魑期の野井戸と考えられる。

SD203 幅0.2m、深さ0.1m。耕作に関係する小溝である。方向は東西で傾かない。

中世の遺構

SG201（溜め池） トレンチの85%程が掘削されていて、全容は不明であるが、トレンチの西部と南西部に堆積土層が残存していた。面積的には60㎡程である。埋土からは平安時代中期の灰釉陶器椀なども少量含むが、鎌倉時代前期の瓦器椀などが比較的多く出土した。池を検出した南東部には最近まで池が残存していたとの話があり、試掘調査でも確認している。後述する自然流路を利用して、中世から溜め池が造られたのであろう。

長岡京期の遺構

このトレンチでは一条大路の両側溝が検出可能であったが、SG201の構築時に削平されたのか検出できなかった。

縄文時代後期から弥生時代前期の遺構

SD205（旧流路） 中世の池に関係した堆積層を掘削すると、トレンチ全体で砂礫層や泥砂層が確認され、流路の埋土が広がっていると判断した。遺構は大きく、上層のSD205Aと中層のSD205B、下層のSD205Cの3時期に分かれ、その規模や堆積土層が異なる。SD205Aはトレンチ全域で調査したが、SD205B・Cは東西幅4m、南北幅22mの調査区をトレンチ内に設けて調査した。

流路の北肩部は一部で確認したが、大半は1区南と1区北を境する用水路の部分に想定され、全面的な確認はできなかった。肩を形成する土層は、10YR3/3 暗褐色砂泥層で、窪みには火山灰が堆積し、少量の縄文時代と推定できる遺物が出土した。

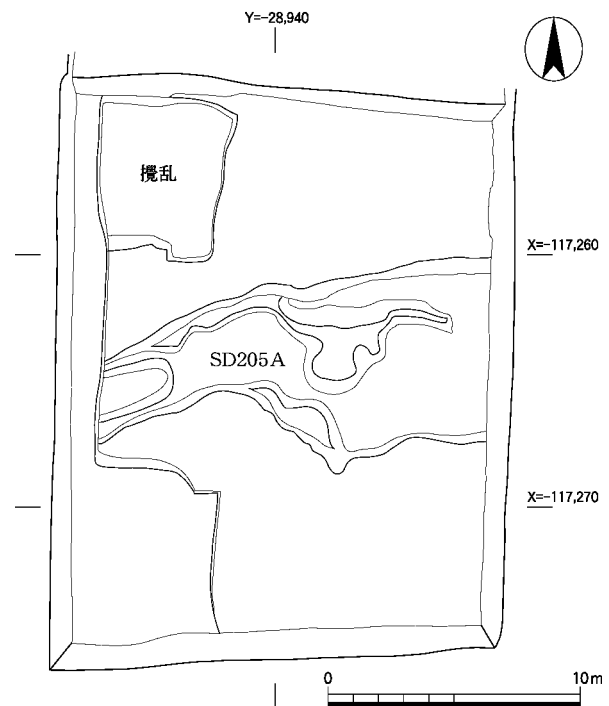


図5 1区南SD205A平面図（1：300）

最上層で検出したSD205Aは、西部では幅3m前後で狭いが、東では広がり7.5mほどになる。堆積土は褐色砂礫層で、厚さは0.3~0.5mほどである。遺物は出土しなかった。SD205Bは大きく3層の堆積層がある。上層は、2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥層を主体とする堆積層で、トレンチ全域に広がり、弥生時代前期の遺物(図12-162)が個体の1/2程出土した。中層は、5Y3/2 オリーブ黒色砂泥層を中心とする堆積層で、縄文時代後期の遺物が少量出土した。下層は、5Y3/1 オリーブ黒色泥土層・5Y2/1 黒色泥土層を中心とする堆積で、少量の遺物が出土したが、帰属年代はわからない。SD205Cの堆積は、5Y3/2や5Y2/1の黒色~オリーブ黒色泥砂層で、もろい緑色の礫を含み、1区南拡張区まで広がる。

1区南拡張区での成果とあわせて考えると、南北方向の規模は50m前後になり、丘陵の北側を流れる自然流路で、縄文時代後期以降の善峰川に関係した一支流と推定される。

3) 1区北

試掘調査では3・4トレンチが設定されており、小溝・柱穴などの遺構が検出されていた。

基本土層は、X=-117,236m地点では、1層 - 盛土層、2層 - 2.5Y5/1 黄褐色泥砂層(床土1)

3層 - 2.5Y6/2 灰黄色砂泥層(床土2)、4層 - 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂泥層(炭含む、床土3)、5層 - 10YR3/3 暗褐色砂泥層(縄文時代晩期から弥生時代前期遺物包含層)、6層 - 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥層(地山)である。

近代の遺構

SK24(肥だめ) 試掘調査3トレンチで確認された遺構で、漆喰構造の土壌であった。径は1.9m、深さは0.4mである。

中世の遺構

SD6~31(耕作溝) 幅0.2m、深さ0.1m前後の東西小溝が、ほぼ3m間隔で並んでいる。北部のSD6~11までと南部のSD18~

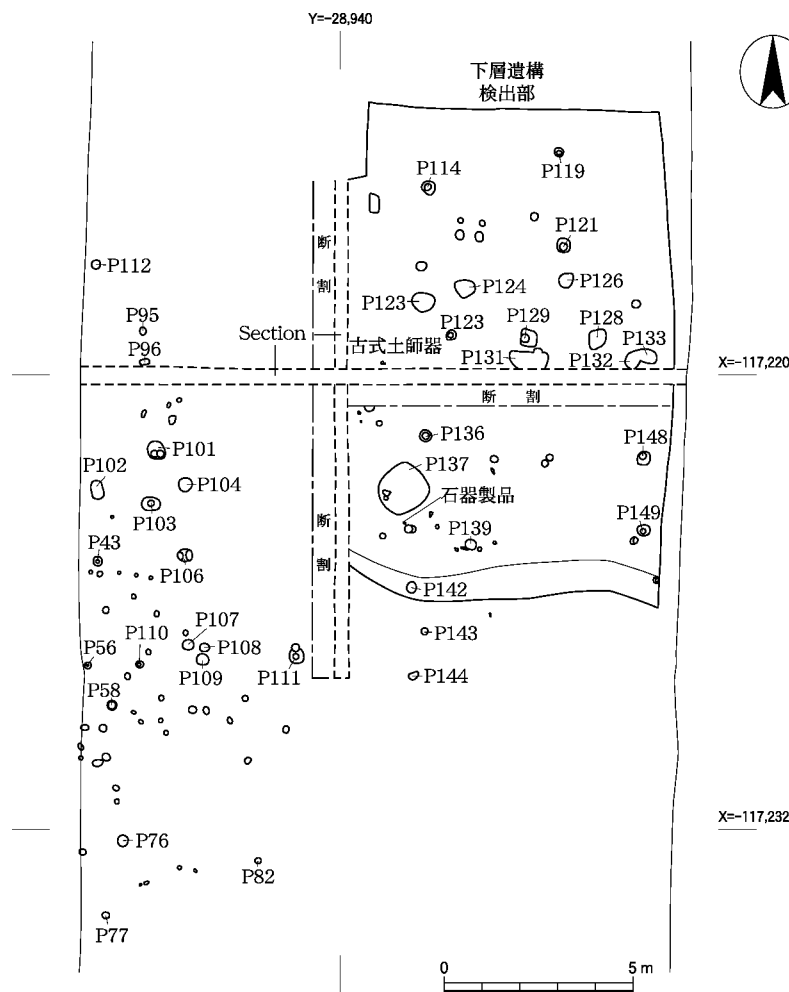


図6 1区北 縄文時代から弥生時代遺構平面図(1:200)

31までは、ほぼ等間隔に並ぶが、SD12～17は3 mの間に密集して存在する。この部分は用地買収に先行して作られた測量図（図20）を見ると、B水田の北畦畔に相当することがわかる。これから、一部の溝は用排水路としての機能が付加され、重なったものと推定される。

1区北での遺構の検出状況を見ると、トレンチの中央部では検出できるが、トレンチ際の東部と西部では検出できないことが多かった。これは、全体に削平を受け、特に南側で大規模な削平が行われたことによると考えられる。

P10・21・34～39 少数の柱穴が出土したが、埋土から時期の明確な遺物が出土しなかったため、時代を決められなかった。

長岡京期の遺構

少量の遺物が中世の耕作溝などから出土したが、遺構は存在しなかった。

古墳時代前期の遺構

SD542（自然流路） 東西方向の流路で延長12m分検出した。検出部分では、ほぼ東西方向で北側に現存する道路と方位が合っていた。埋土は、上層が黄褐色泥砂層や暗灰黄色粘土層で、下層は暗灰黄色砂礫層や灰黄褐色砂礫層で、下層の砂礫のレベルをみると、西側が高く東が低い。これから西部の西山山系から流れてきたことがわかる。古墳時代前期の遺物が少量出土した。

縄文時代後期から弥生時代前期の遺構

トレンチの中央部、X=-117,120mの周辺で炭混じりの10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥層から小片の遺物が出土し、その後石包丁なども出土したので、南北13m×東西9mを掘り下げ、遺構の検出を行った。明確な遺構が少ないことから、湿地帯の包含層と判断される。

検出した遺構は、径0.05～0.1m前後の小規模な杭や柱穴状の遺構が主体で、中には0.5～1.4mと規模の大きなものもある。炭や土器が埋土に含まれるものもあるが、有機物の痕跡を示す穴も存在した。

包含層や遺構埋土からは、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器類やサヌカイトの剥片、石包丁・ミニチュア石棒・砥石などの遺物が少量出土したが、時代を明確にする良好な遺物は存在しなかった。

4) 西拡張区

1区南・1区北トレンチが遺構面まで重機で掘削されていたため、耕作土層が存在する敷地の西側を選び、延長38m、幅2.0～3.0mのトレンチを設けて、耕作土層の直下から遺構の検出を行った。また、その位置は西側で耕作中の水田畦畔との関係を遺構で確認するために、水田3枚分にわたるように設定し、現存する畦畔の南を南畦畔（図20 - 3水田南畦畔）、中央のものを中央畦畔（図20 - 4水田南畦畔）、北を北畦畔（図20 - 5水田南畦畔）として説明する。

ここでは大きく3面の遺構面があり、第1a・1b、第2a・2b面は中世に属する。第3面は縄文時代晩期から弥生時代前期の面であるが、1区北の成果などからトレンチの西側に断割りを行い、部分的な確認に留めた。

基本土層をX=-117,224m地点でみると、1層 - 盛土層、2層 - 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥層（耕作土）、3層 - 10YR5/3 黄褐色砂泥層（床土1）、4層 - 10YR5/4 黄褐色砂泥層（床土2）、5層 - 10YR5/4 黄褐色砂泥層（床土3）、6層 - 10YR3/4 黄褐色砂泥層である。

中世の遺構

大きくは2面、細かく見ると4面の遺構があり、第1面から順次説明する。なお、トレンチ西側の外には前述したように、東西方向の畦畔が3本走るが、第2a面までは中央畦畔を境にして北と南で遺構の方向が異なり、北部と南部に分けて記述していく。

第1a面 基本土層の3層上面で検出した。耕作に関係した小溝を多数検出した。北部は東西の小溝が10条前後あるが、規模が小さく断片的に残る。現代の北畦畔（図20）に相当したトレンチ内の北部には1.5m以上の幅をもつ浅い溝SD403が存在し埋土から近世の遺構と判断される。この南にはSD301があり、その間が幅0.5mの畦畔とも考えられるが、確定はできない。中央畦畔部には、やや幅の広いSD321があり、この南にあるSD317を含む範囲に畦畔を想定できるだろう。南部では南北方向の溝SD312～315が検出されているが、南畦畔の痕跡はこの段階では不明である。

第1b面 基本土層の3層上面で検出した。基本的には第1a面と同様の方位で小溝がある。北部には14条の小溝があり、中央畦畔北溝のSD333は幅が1.0mあるが、対応する南溝は存在しない。南北溝との間に5mほどの空地があるので、畦畔（SX406）の存在を推定しておく。南部には南北溝のSD334～338があり、南畦畔相当部には幅が0.5mの畦畔と平行する2条の小溝SD339・340がある。北側にある南北溝がここまで伸びないことから、南畦畔（SX474）をここに想定できるだろう。

第2a面 基本土層の4層上面で検出した。北部では第1面までと異なり、比較的規模が大きい溝が増える。中央畦畔のSX406は両側溝が完備し、明確になる。その幅は1.3mで、北には0.6m幅のSD360、南には0.5m幅のSD362が平行して存在する。さらに、その南には幅0.2mの小畦畔があり、SD392が存在している。

南部には第1a・1b面と同様に南北小溝が多数ある。南畦畔は幅が1.3mで、平行する北溝のSD388は0.6m幅、南溝のSD390は1.5m以上の規模がある。現在の幹線用水路も東西の坪界線で



写真4 西拡張区中央畦畔SX406（東から）



写真5 西拡張区南畦畔SX474（東から）

ある南側25m地点ではなく、この部分を通る。

第2b面 基本土層の5層上面で検出した。北部・南部共に東西方向の耕作溝が多数ある。第2a面に引き続き、中央畦畔のSX406と南畦畔SX474が共にある。耕作溝には、鋤を使用した痕跡をもつものも2基ある。また、埋土は灰色系の黄褐色土で水が流れた痕跡を確認できるものもある。

縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構

1区北トレンチで検出した湿地帯に繋がる遺構で、第3面として調査した。10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥層を埋土とする柱穴状の遺構を10数基、石鏃1点と土器片を数点発見した。

5) 北拡張区

1区北トレンチの北部で東西方向の流路、SD542を確認したため、その北肩を検出する目的で設定したトレンチである。

基本土層は、北部のX=-117,174.5mでは1層 - 盛土層、2層 - 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥層、3層 - 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥層、4層 - 10YR4/4 褐色砂泥層、5層 - 10YR4/3 黄褐色砂泥層、6層 - 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質砂泥層、7層 - 2.5Y5/24/2 暗灰黄色粘質砂泥層である。

中世から近世の遺構

1区西拡張区などと同様に、東西と南北方向の小溝が10条前後ある。南北溝が新しく、東西溝が古い。

古墳時代前期の遺構

SD542 西から東に流れる流路で、東西方向の延長は1区北の成果も加味すると14m、南北方向では17mまで確認したが、東西道路を越えて2区まで広がり、X=-117,154m地点で北肩を確認し、ほぼ南北に44m前後の規模となるが、この肩は一時的で、最終的には2区北部のX=-117,082m前後まで広がる。

堆積層は大きく3層に分かれる。上層は南肩部に 5Y5/2 灰オリーブ色砂泥層、10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥などが堆積し、その北には 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫層などの砂礫層があり、流れの北側に砂礫が堆積し、その後流速が弱まり、最後に泥砂層が堆積したことがわかる。中層は砂礫層が主体で、その径も20cm前後のものまでを含み、速い流れであったことがわかる。下層には中層と同様に砂礫層もあるが、肩部に存在した 2.5Y5/3 黄褐色粘土のブロックがあり、流水で肩や底が抉られた状況を示している。

短期的な北肩部のX=-117,154m地点では、2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥層が堆積し、この上層に南部の砂礫層がのっていることから、北部から埋没したことがわかる。

古墳時代前期の布留式に比定される遺物は上層の埋土から出土したが、それ以下の層からは発見されなかった。

1区北での検出時には遺構の方位が現存する道路と同一方向なので、古墳時代後期から古代に關係した、この地域を開発するための幹線用水路と考えて、上記のように拡張トレンチを設定したが、結果は西で次第に肩が北に振れて行き、出土遺物も古墳時代前期、布留式期と限定された

ため、自然流路との結論に達した。

(3) 2区の層序と遺構(図7~11、図版5~7・13~21)

調査開始前は南北75m前後の水田と宅地が3区画存在した。西区画水田は東の境界がトレンチ北部ではY=-28,941m前後にあり、西側の1.5mほどはトレンチ外であったが、ほぼ完掘できた。中央区画は宅地化されていたが、完掘することができた。東区画も宅地化されていて、その西側境界痕跡はY=-28,911m前後にあり、東西幅では2.5mほどが調査できた。このトレンチでは、縄文時代晩期から近世にわたる、各時代の遺構・遺物を確認した。

東壁のX=-117,154m地点の基本土層は、1層 - 盛土層、2層 - 10YR4/4 褐色泥砂層、3層 - 10YR5/3 にぶい黄褐色泥砂層、4層 - 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂層、5層 - 10YR5/1 にぶい黄褐色泥砂層、6層 - 10YR5/4 にぶい黄褐色泥砂層、7層 - 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質泥砂層である。

遺構検出は、近年まで耕作していた水田の床土層を除去した面 - 第1面、中世の包含層を除去した面 - 第2面、長岡京期の包含層を除去した面 - 第3面、古墳時代の包含層を除去した面 - 第4面に分けて行った。第1面は中世から近世の遺構面、第2面は平安時代後期から中世前期の面、第3面は長岡京期の面、第4面は弥生時代から古墳時代の面である。

中世から近世の遺構

第1面では耕作溝を多数検出した。前記したように調査前の水田は西・中央・東の3区画に分かれていた。ここではこの区画と耕作溝の方位の関係に触れながら記述する。

西水田では南北方向の耕作小溝を多数検出した。当然同様の状況がその東の2区画でも想定されるが、中央区画では試掘調査で床土面の削平が行われていた。また、この部分は厚く床土層を盛土し、3区画の水田としていたために、表土層の掘削時に床土層の下面まで掘り下げたので多数の南北溝を検出できなかった。

中央区画では南北方向の溝SD151を検出し、そこから「T」字状に東西溝のSD206・208・209・220・222・223・225・227などが東に延びていて、その間隔はおおむね2.9mであった。ここでは西区画とは方位が異なることはもとより、幅も中央や東区画の方が大きい。またX=-117,118m地点では切り合いがあり、南北小溝が先行して掘削されたことがわかる。これから、当初は2区画の水田があり、後に中央区画の東側や東区画に盛土を行い、面を揃えて3枚の水田としたことがわかった。ただ、X=-117,140mから南部では、石見東西中央条里坪界線に想定される道路から22m北までは全体に南北方向の小溝が走る。この部分だけは別区画の水田の可能性が高い。

SK27 径0.9mの桶を据えた土壌で、掘形は1.3~1.4mあり、深さは0.2mほどある。桶の側板は残っていないが、底の棧が1本残る。埋土には握り拳大の礫が多量に含まれており、近世の陶器が出土した。

中世の遺構

SB01 東西4間、南北4間以上で、南西のコーナー部を確認した。東側柱は、南から1.85m・2.4m・1.5m・2.0mで一定しない。南側柱も東からの柱間は、2.0m・1.4m・1.3m・1.6m・1.4m・2.6mとなり、東側柱と同様である。2mを越える側柱の交点には柱があるが、1.6m未満の柱間に対応する柱交点には存在しないことから、補強の柱である。

この建物の特徴は、その南東部に三角形の土壌SK472が付属することである。北西部の長辺部分は肩が緩やかであるのに対し、側柱側はほぼ垂直に落ち、建物内に上手く収まっている。

SB02 東西2間以上、南北6間の規模で、総柱の建物である。南側柱は西からの柱間が2.6m・2.5m、西側柱は南から1.9m・2.0m・1.8m・2.0m・1.8mとなり、比較的揃っている。北側柱は西からの柱間は、1.8m・2.5m・1.8mとなる。この建物も側柱筋にはのらない柱も幾つかあるが、総柱建物と考えられる。

SB03 SB01・SB02の後に作られた建物で、SB01とほぼ重なるが、東西4間、南北1間以上に復元できる。柱間は1.5~2.3mとなる。これも総柱建物である。

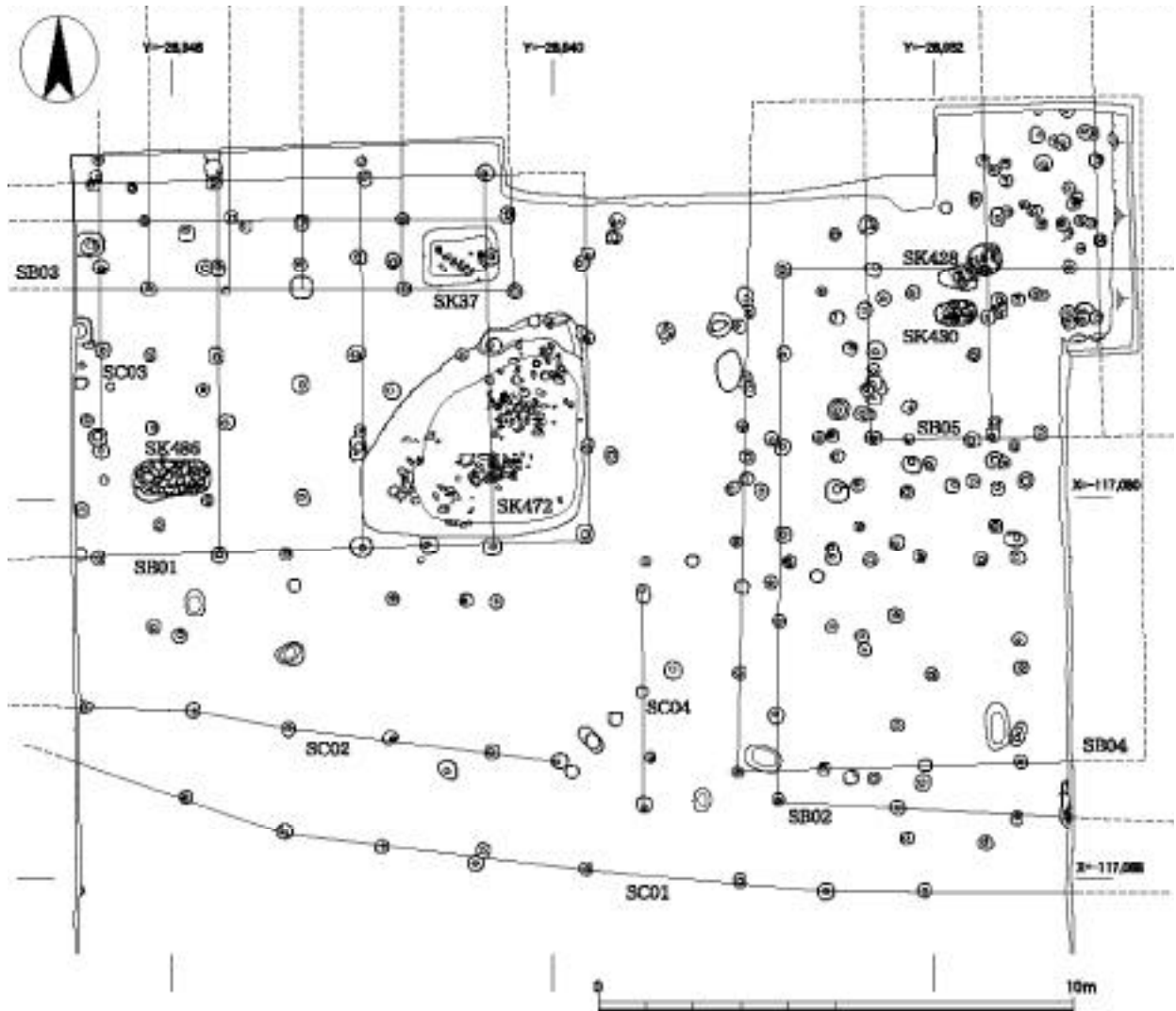


図7 2区中世建物平面図(1:150)

SB04 SB02と重なる位置に作られている。東西3間以上、南北6間、柱間は1.6~2.1m前後である。SB01~03と同じく側柱の交点に必ずしも柱は据えていないが、総柱建物に復元できる。

SB05 トレンチの北東部で検出した掘立柱建物で、東西2間以上、南北3間以上に復元できる。東西の柱間は2.5m、南北の柱間は2.5m等間である。この建物は他と異なり、柱掘形に根石を据えていることで、掘形も大きい。

SC01 建物群の南を限る柵列で、北西から南東に伸び、建物とは平行しない。柱間は1.7~2.2mほどあり、建物と同じく揃わない。

SC02 SC01の北側に位置する柵列で、SB04の南側柱に繋がる位置に作られている。

SC03 南北方向の柵列で、トレンチの北西部で検出した。柱間は1.75~2.0mである。

SC04 2.0~2.4mの柱間をもつ遺構である。

SK472 ほぼ二等辺三角形をした土壇で、SB01の南東隅に収まる。土壇東辺と南辺の建物側柱列側は4.5mあり、建物内部の一边は6m程ある。側柱側はほぼ垂直に掘られているが、長辺部分は緩やかに傾斜し、内部に降りやすいようにしてある。埋土は大きく2層に分かれ、上層には0.1~0.4mの礫が投げ込まれた状態で50個前後出土した。下層には灰色泥砂層が薄く張られ、その下は小礫で固められていた。12世紀後半から13世紀前半の瓦器を中心とする遺物が比較的多く上層から出土している。

SK37 1.6m x 1.2mの規模をもつ正方形に近い土壇で、深さは0.2m程で浅い。埋土は基本的に2層で、上層は中央部に炭を含む黒褐色砂泥層が堆積し、

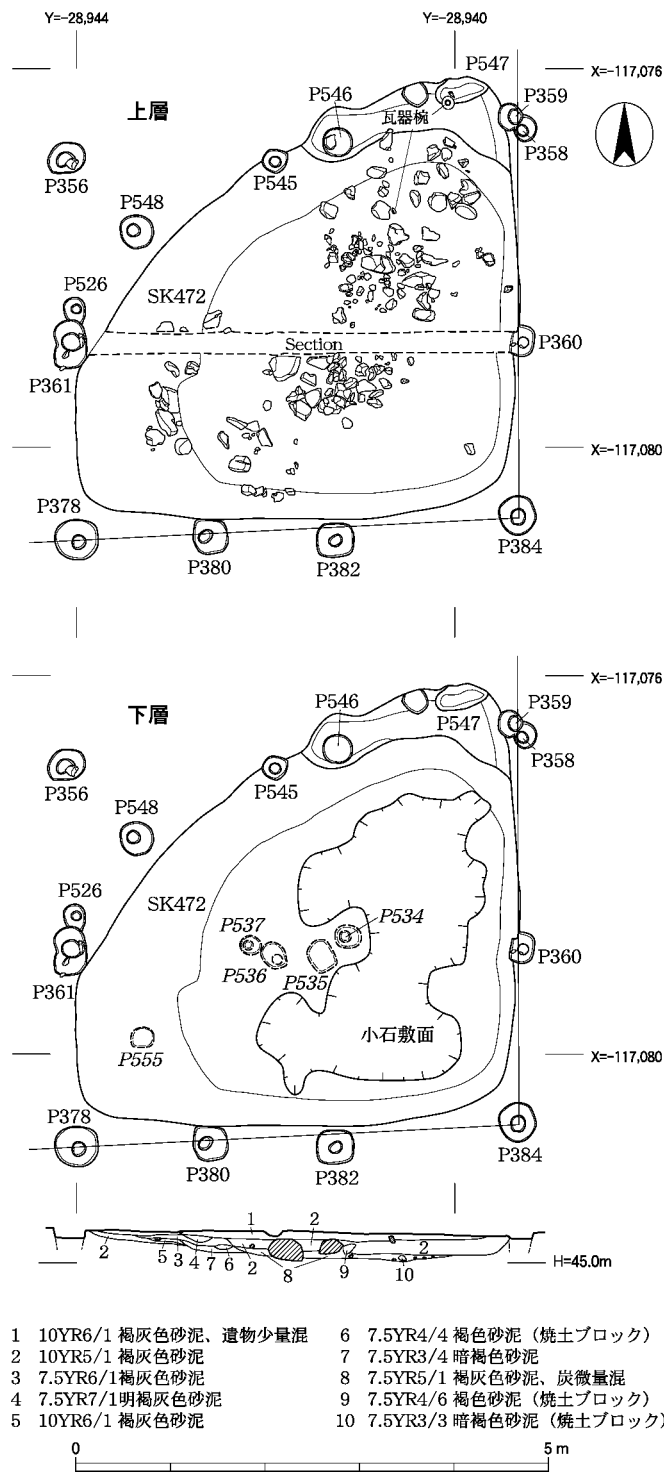


図8 2区SK472実測図(1:80)

下層には黄褐色砂泥層が堆積していた。各層には小石と細片となった瓦器椀や皿などが多く含まれていた。また、底の北西部には瓦器椀が正位置で据えられていた。

この遺構は完形の瓦器椀が出土したことなどから土壌墓と考えられるが、人骨など直接的な遺物が出土しないなど若干の問題を残すが、ここでは遺物の状況から墓と考えておく。

SK486 東西に長辺がある1.7m×0.8mの土壌で、底に外部から持ち込んだ炭や灰を薄く敷き、その上に径20cmほどの平らな石を27個使い平坦に敷き詰めている。数個の石は底に敷かれた後に平坦にするために叩き込まれており、この過程で割れていた。また、敷石には熱で焦げた痕跡があり、火が内部で焚かれているが、掘形にはその痕跡が顕著ではなく、小規模であったことがわかる。

遺物は敷石にのった状態で、西部と東部から13世紀前半の土師器小皿の破片が出土した。数は3個体分で少ない。西部からは口縁端部が外反する12世紀前半の土師器片が出土した。

土壌の機能としては人体を火葬した茶毘場と考えられるが、人骨が検出できない、被熱が少ない、などの否定的な要素も多い。

SK428 SK486と同様の構造をもつ土壌であるが、西部が水田区画の境界となり破壊されている。現状の規模は東西が0.9m、南北は0.6mで、0.2m前後の石が敷き詰められている。

SK430 SK486・428と同様の遺構である。現状の規模は東西幅が0.9m、南北幅は0.6mある。径0.15～0.2mの川原石が敷き詰められ、東側に敷かれた一部の石は立てられていた。また、一部の石には被熱痕跡がある。

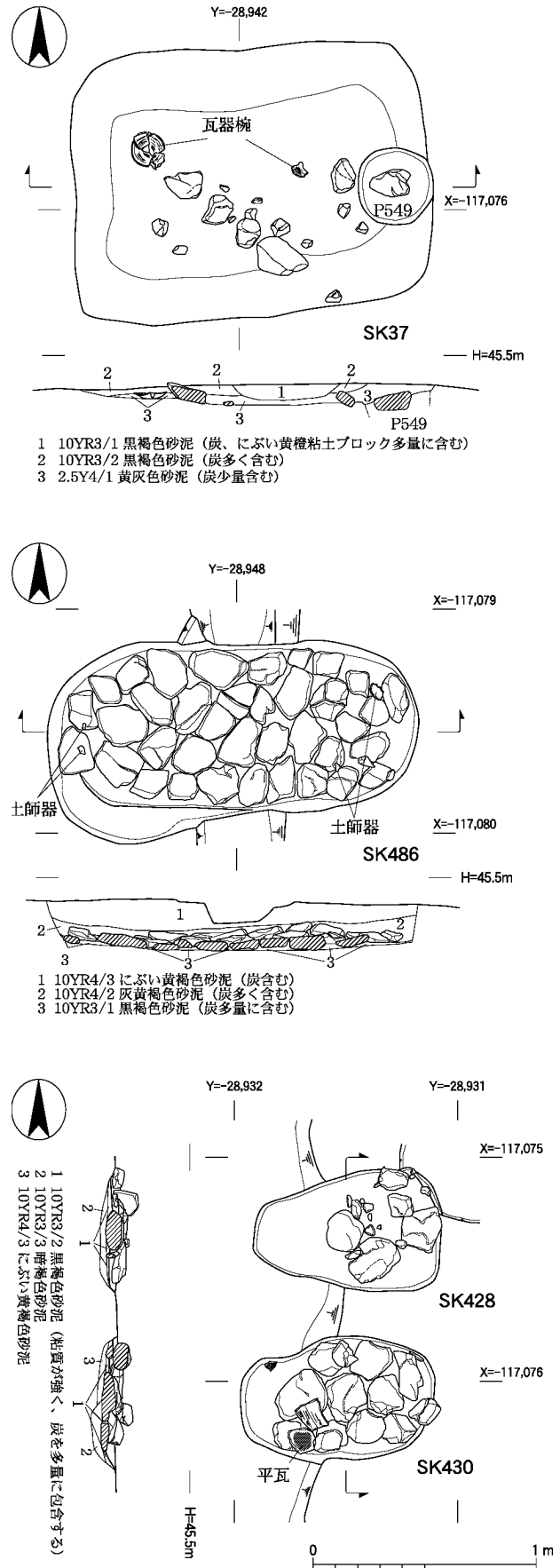


図9 SK37・486・428・430実測図(1:30)

石を外して土壌の底を確認したところ、上記の土壌と同じく炭が出土した。この土壌も西部が近世の畦畔で破壊されている

建物や柵列は遺構方位から大きく3群に分かれる。ほぼ正方位のSB02、西に傾くSB01・SC03、東に傾くSB02・04・05である。柱穴の直接的な重複関係がないため、各群の前後関係は不明であるが、建物群が西東の2群に分かれ、それぞれ2棟以上あることから、大きく2時期を考えておく。

長岡京期の遺構

第3面で遺構検出を行った。道路・道路側溝・溝・土壌・柵列などを検出したが、建物は存在しない。

一条条間南小路 南側溝と北側溝があり、その幅は溝の心々で測ると西部で8.9m、東部ではやや狭く8.0mとなる。路面幅は狭い中央部で5.0m、広い西部では7.2mほどある。検出レベルは西が高く45.18m、東は44.96mと低く、地形と同じ傾斜をしていることがわかる。石敷などの路面の造作は存在しない。道路センターの座標は、Y=-28,936m地点で、X=-117,147.7mとなる。

SD532 小路の南側溝で、幅は1.8m前後、深さは0.5mほどある。北肩には段があり、当初幅が狭く浅い溝を掘り(図10 SD532 - 5層)、後に南に拡張し、本格的に深く掘ったことがわかる。埋土は大きく上層と下層に分かれ、上層は溝を埋め戻した土層(図10 SD532 - 1~7層)、下層は暗灰黄色泥砂層が主体で、流水により堆積した土層である。底には構造を強化するためか、小礫を投げ込んだ部分が西部を中心に存在する。Y=-28,936m地点での溝心はX=-117,151.9mである。

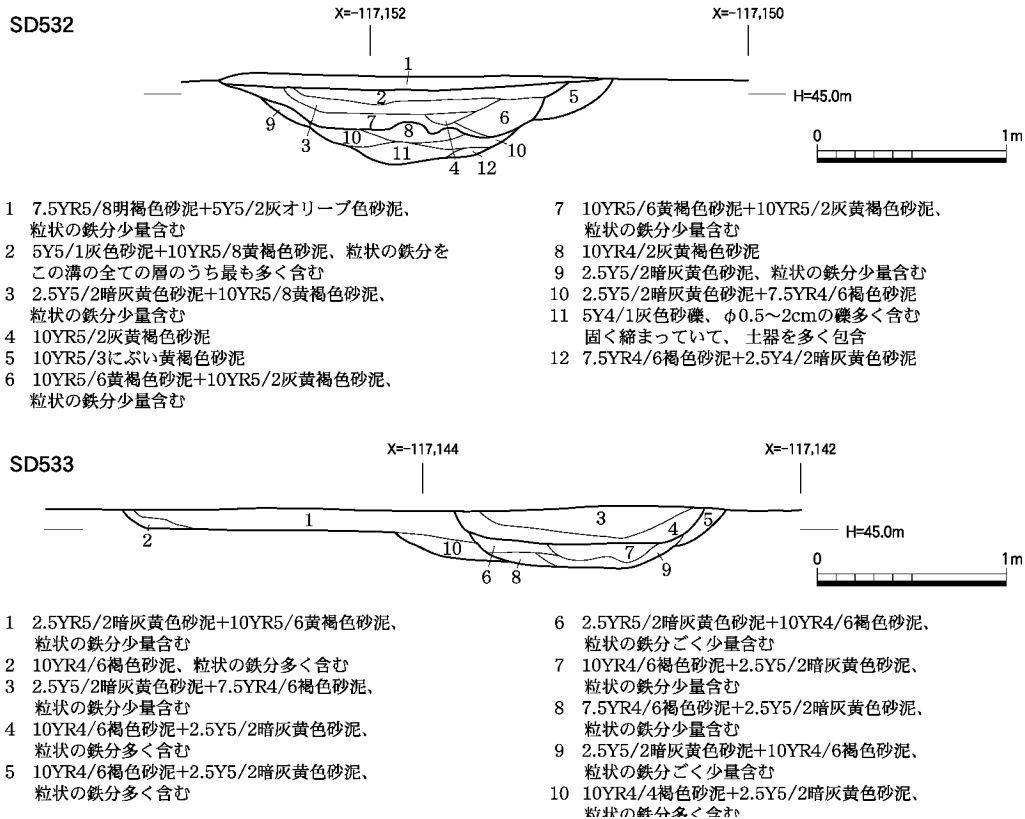


図10 2区条坊側溝SD532・533断面図 Y=-28,942.4mライン(1:40)

出土遺物は、上層から土器の破片が出土したが、下層からは少ない。東部からは土馬の破片が底に頭を突き刺した状態で出土した。

SD533 小路北側溝で、最終形態は2 m前後の幅であるが、当初は中央の7.5mほどが道路側に広がり(図10 SD533 - 1・2・10層)、全体の幅は3.2mほどになる。この広がりに対応して深さも異なり、狭い部分では0.2mほど、広い部分では0.4mほどある。中央部の広がった部分の底には南側溝と同様に石が投げこまれていた。南側溝と比べ、幅や深さに出入りがあり、整然とは掘られていない。溝の座標は、Y=-28,936m地点で、X=-117,143.6mが溝心である。

また、西部では北肩に幅0.6m、長さ2 mにわたり、平坦に小礫を敷いた部分SK526(図11)がある。溝が一定程度埋まった段階で、溝の北肩部に幅0.5mほど小石を敷き詰めている。この東には条坊側溝に流れ込むSD543があることから、この石敷は側溝を渡る橋状の施設の一部とも推定されるが、杭穴などの橋桁を固定した遺構は存在しなかった。

この溝は東部では一旦狭く、浅くなり、その東では北肩部の砂礫層を避けてまた狭くなる。このように南溝に比べ複雑な構造を北側溝にする。これは、西部や北部から流入する水を一旦、幅の広い中央部でプールして、オーバーフロー分を東に流すためであろう。

SK563 長辺6 m、南側の短辺は2 mで、北端では狭くなる紡錘形の浅い土壌で、全体に遺物が広がっていたが中心は南部にある。埋土は3層で、上層は黒褐色砂泥、中層はにぶい黄褐色砂泥、下層は暗オリーブ色砂泥層で土器や炭が多量に含まれ、礫も存在した。土師器や須恵器などの供膳形態の器と、少量の煮焚具が、土馬・ミニチュア竈などの祭祀遺物と共に混然と出土した。土馬は頭や脚部が破片で出土したが、接合できる。遺物内容からして、祭祀に使用した遺物を処理した廃棄土壌である。

SK567 SK563と並行する溝で、北端はSK563と同じ位置にある。幅は3 m前後で一定するが、北部は0.2m前後で深く、南部は0.1mと浅い。少量の遺物が出土した。

SD543 小路北側溝に流れ込む南北溝で、幅は2 m前後で一定であるが、深さは場所によって異なる。最も深い部分は北部で、0.6mほどあり、3 mほどの間で多量の遺物が出土したが、X=-117,124~-117,134m地点まではほとんど遺物が出土しなかった。ただ、その南部では黒色

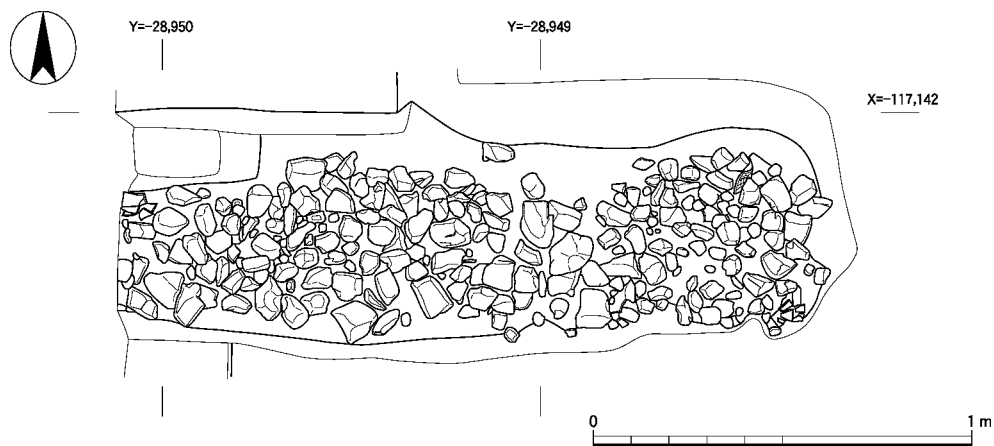


図11 2区SK526平面図(1:20)

土器壺を中心に遺物が出土した。

SD544 SD543と平行する南北溝で、北肩部はSD543と揃うが、12mほどで途切れ、小路北側溝には繋がらない。幅は1.2～2.5mと出入りがあり、北部が広い。深さも場所により異なる。少量の遺物が出土した。

SK530 小路北側溝と平行する溝状の遺構で、東部は幅が一定であるが、西部は地山の砂礫層を避けたのか異なる。出土遺物はほとんどなかった。

SD552 調査区の北部で検出した東西溝で、14m分を調査した。幅は1.0～1.3mで、深さは0.5m前後ある。堆積土は、上層がにぶい黄褐色砂泥層で、下層は褐色砂泥層を主体とし、底には粗砂層が薄く堆積していた。砂層が薄く堆積していた。出土遺物は少ないが、須恵器の破片がSK563出土遺物と接合し、埋没時期がわかる。

SD553 SD552と平行している。規模は0.9～1.3m前後で、一定しないが、深さは0.5mと同じである。堆積土は、上層がにぶい黄褐色砂泥層で、下層は灰褐色砂泥層を主体とする。出土遺物は少ない。

SC10 SK563の南に径0.5mの掘形が3基並ぶ。柱間は1.8～2.1mと一定しない。各柱穴から長岡京期の遺物が出土し、当該期の遺構で唯一の柱穴遺構である。

SK542 正方位に掘形を合わせて掘削されている井戸状の遺構で、一辺が3.0m前後で隅丸方形をしている。深さが2.3mあり、掘形の中央部には径1.3mほどの井戸側の埋土に相当する土層があることから、井戸と考えて遺構検出を行ったが、木枠などの井戸説を補強する資料を得ることはできなかった。この部分には砂礫層が広がっており、湧水を狙って井戸を掘ったが、水がなく途中で放棄した遺構と推定される。

長岡京期の遺構は、道路とその側溝、溝、土壇、柵列などで、調査面積の割には閑散としていた。一条条間南小路の検出当初は、宅地内で建物遺構の検出を第1の目標としたが、存在しないことがわかった。遺構と出土遺物の関係でも、多量に出土するSK563・SD543などに比べ他の遺構は少なく、当地の利用状況の一端がこれからもわかる。

弥生時代から古墳時代の遺構

SD600 東壁の断割り作業で弥生土器が出土し、X=-117,080m地点に北肩があった。このため、2区の北部で面的に遺構を確認する目的で南北方向のトレンチを3本設定したが、いずれのトレンチでも北肩は検出できなかった。深さは0.6mほどで、浅い流路である。

北肩部の堆積土を東壁断面でみると、上層はにぶい黄褐色泥砂層、中層はにぶい黄褐色砂泥層で小礫を含み、下層はにぶい黄褐色泥砂層で礫を多量に含む。遺物は下層からの出土が多く、一部、弥生時代中期後半のものもあるが、大半は後期から古墳時代前期のものである。

4 . 遺 物

(1) 遺物の概要

縄文時代後期から近世にわたる各時代の遺物が出土した。その量は整理箱にして75箱分あり、ほとんどが土器類で、少量の石器がある。時代別では、弥生時代後期から古墳時代前期、長岡京期、平安時代後期から鎌倉時代前期のものが比較的まとまっているが、その他の時代は少ない。

1区における遺物の出土状況は、中世に関係したものは1区南のSG201や1区北の小溝、西拡張区の小溝から出土した。古墳時代の遺物は1区北のSD542から出土している。縄文時代後期から弥生時代の遺物は1区南のSD205や1区北中央部の包含層から出土した。

2区では、中世の遺物は北部の建物周辺からまとめて出土した。長岡京期の遺物は道路側溝や溝・土壌から多量に出土した。弥生時代から古墳時代の遺物は、下層の流路から出土している。

ここでは1区・2区に分けて、時代の新しい遺物から順に記述する。

(2) 1区の出土遺物 (図12、図版27)

1) 中世の遺物

中世の遺物には土師器、瓦器椀、中国陶磁器などがあるが、細片で実測できるものは存在しない。金属製品では銅銭が2点出土した。西拡張区のSD321からは風化が進んだ銅銭が出土したが、種別は不明である。1区南のSG201からは元通寶が出土した。

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
縄文時代後期 ～晩期	縄文土器・石鏃・小型石棒	2箱	深鉢1点、土器片10点、石鏃1点、 小型石棒1点	1箱	0箱
弥生時代前期	弥生土器・石包丁	2箱	壺1点、石包丁1点	1箱	0箱
弥生時代後期 ～古墳時代前期	弥生土器	21箱	壺7点、甕5点、鉢2点、高杯4点	11箱	0箱
古墳時代後期	土師器・須恵器	2箱	土師器1点、須恵器1点	1箱	0箱
長岡京期	土師器・須恵器・黒色土器・ 製塩土器・ミニチュア土器・ 土製品(土馬)・瓦・鉄釘	24箱	土師器58点、須恵器13点、黒色土器 4点、製塩土器3点、ミニチュア土 器5点、土馬4点	11箱	5箱
平安時代	土師器・須恵器・緑釉陶器・ 灰釉陶器	1箱		1箱	0箱
平安時代後期 ～鎌倉時代	土師器・須恵器・瓦器・輸入 陶磁器(白磁)・輸入銭貨・ 金属製品(鉄釘)	21箱	土師器15点、瓦器25点、輸入陶磁器 10点	10箱	5箱
室町時代	土師器・輸入陶磁器(白磁)	1箱		1箱	0箱
近 世	国産陶器・磁器	1箱		1箱	0箱
計		75箱	172点(27箱)	38箱	10箱

2) 長岡京期の遺物

西拡張区の中世包含層から長岡京期の杯Aが出土した。底部から体部外面、内面の体部から口縁部にかけて数本の墨線が引かれている。

3) 縄文時代から弥生時代の遺物(図12、図版27)

X=-117,220~-117,230m地点の包含層から打製石鏃・小型石棒・石包丁が出土した。打製石鏃(158)はサヌカイト製で、基部が凹む無茎タイプである。長さ約2cmで、片面は全面に押圧剥離を施して形を整え、平坦面を残す裏面は縁部のみ押圧剥離して仕上げる。小型石棒(159)は硬質凝灰岩製で、直径約0.8cmの円柱の先端部に割りをいれて成形する。長さは破損のため不明である。石包丁(160)は粘板岩製の半月形直線刃型式である。半分に割れているが刃は片刃で、紐孔はおそらく2個所に穿孔されていたのであろう。刃部に斜め方向から横方向の使用擦痕が確認できる。

SD205Bの上層からは弥生時代前期の壺(162)が出土した。浅い削り出し突帯に、ヘラ描き沈線文を肩部に施している。下層から縄文時代の甕が少量出土した。「く」字状に屈曲する口縁部で端部に刻み目がある。

その他、長さ9.7cm、幅4.4cmのサヌカイト剥片、長辺16cm、短辺11cm、厚さ4.5cmの砥石が出土している。

(3) 2区の出土遺物(図12~19、図版22~27)

1) 平安時代後期から鎌倉時代の遺物(図13、図版22)

この時期の遺物は遺構が集中する2区北半から、瓦器・土師器などがまとめて出土した。出

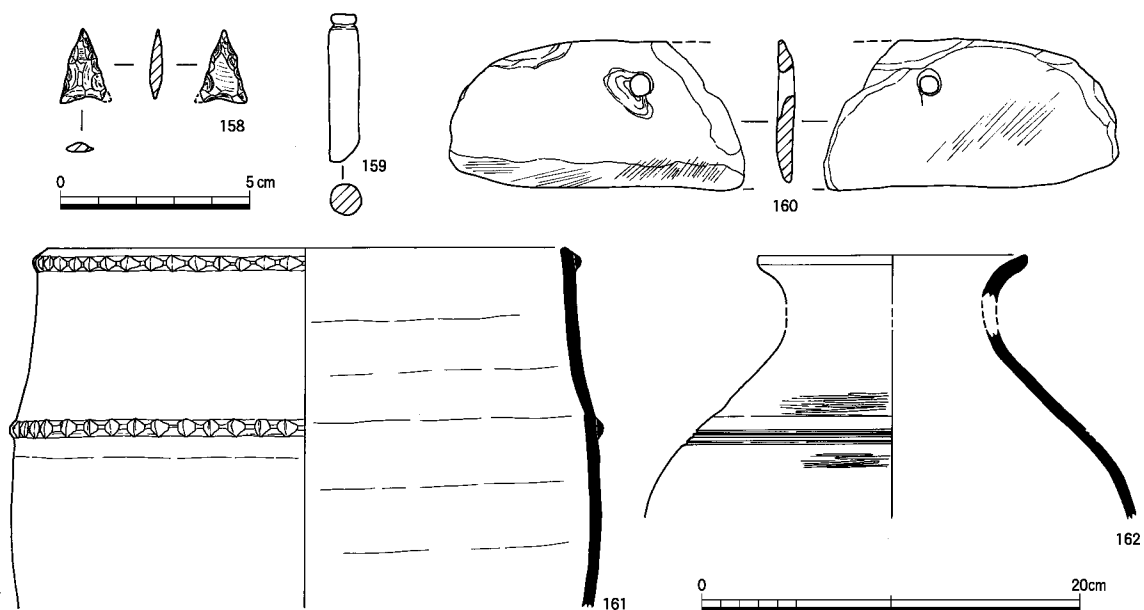


図12 1・2区出土縄文時代晩期から弥生時代前期遺物実測図(石器1:2、土器1:4)

土する遺構は、建物柱穴や土壌・包含層など多岐にわたるが、ここではとくに一括性が高い土壌SK486・37・472の資料を中心に報告する。

SK486出土土器

瓦器と土師器が埋土内から出土したが、出土点数が少なく瓦器には図示できる資料がない。土師器は小皿（1・2）と、やや外反する口縁をもつ大皿（3）が出土しており、少ない資料ではあるがこの遺跡では型的に古い様相を示している。

SK37出土土器

瓦器と土師器がまとまって出土したのに対して、中国陶磁器は破片が2点と非常に少ない。これらの破片数の比率をみると、瓦器（531点）は64.1%、土師器（296点）は35.7%で、中国陶磁器は0.2%しかない。また口縁部破片で検討すると、土師器では全体の83%近くを小皿（4～6）が占めており、大皿（10）は17%となる。これに対して瓦器では椀（11～18）が89%を占めており、小皿（7～9）は11%しか認められない。瓦器椀は断面逆台形のもの（11）もあるが、ほとんどがしっかりした断面三角形の高台を持つ。焼成が甘く調整痕跡を確認できないものが多いが、内面は渦巻き状の磨きが施されており、外面調整として粗い磨きをもつもの（15・17・18）もある。瓦器小皿は底部内面の調整が確認できないが、体部内面は丁寧に横磨きしている。

SK472出土土器

瓦器（3,167点）、土師器（1,574点）、焼締陶器（15点）、中国陶磁器（11点）が非常に一括性の高い状態で出土した。これらの比率をみると、瓦器は70.8%、土師器は28.6%、焼締陶器は0.4%、中国陶磁器は0.2%で瓦器の比率が高くなっている。SK37資料と同じく口縁部破片で器種構成をみると、土師器では95%弱が小皿（19～24）となっており、大皿は5%強しかない。逆に瓦器では椀（27～33）が92.5%と増えており、小皿（25・26）は7.5%と少なく、破片数でみるかぎり瓦器椀と土師器小皿のセット関係がより明確になっている。

出土遺物を個別に観察すると、土師器小皿は口径がやや小さく浅い資料が目立ち、一部に回転系切り痕跡を残す土師器（24）が出土しているのも注目できる。瓦器椀はしっかりした断面三角形の高台を持ち、体部内面は渦巻き状の暗文を施してある。底部には螺旋状暗文を施すもの（33）もあるが数は少なく、ジグザグ状の暗文が多い。外面は粗い磨きを施すもの（30）はほとんど認められず、未調整のものが多い。この他、瓦器三足釜の口縁部と脚部が出土している。中国陶磁器は白磁椀類（34）と類（35）が出土している。

その他の出土土器

SB01柱穴から土師器小皿（36・37）、瓦器小皿（39）、瓦器椀（40）、SB02柱穴から瓦器椀（41）、SB03柱穴から瓦器小皿（38）が出土しているが、SK472出土資料と比較して型的な時期差は認められない。この他、建物としてのまとまりは把握できない柱穴から白磁椀（44～46）が出土し、また、遺構検出中あるいは包含層などからも、土師器皿・瓦器椀（42）や白磁椀（43・47～50）などが出土した。

その他、包含層から開元通寶が出土した。

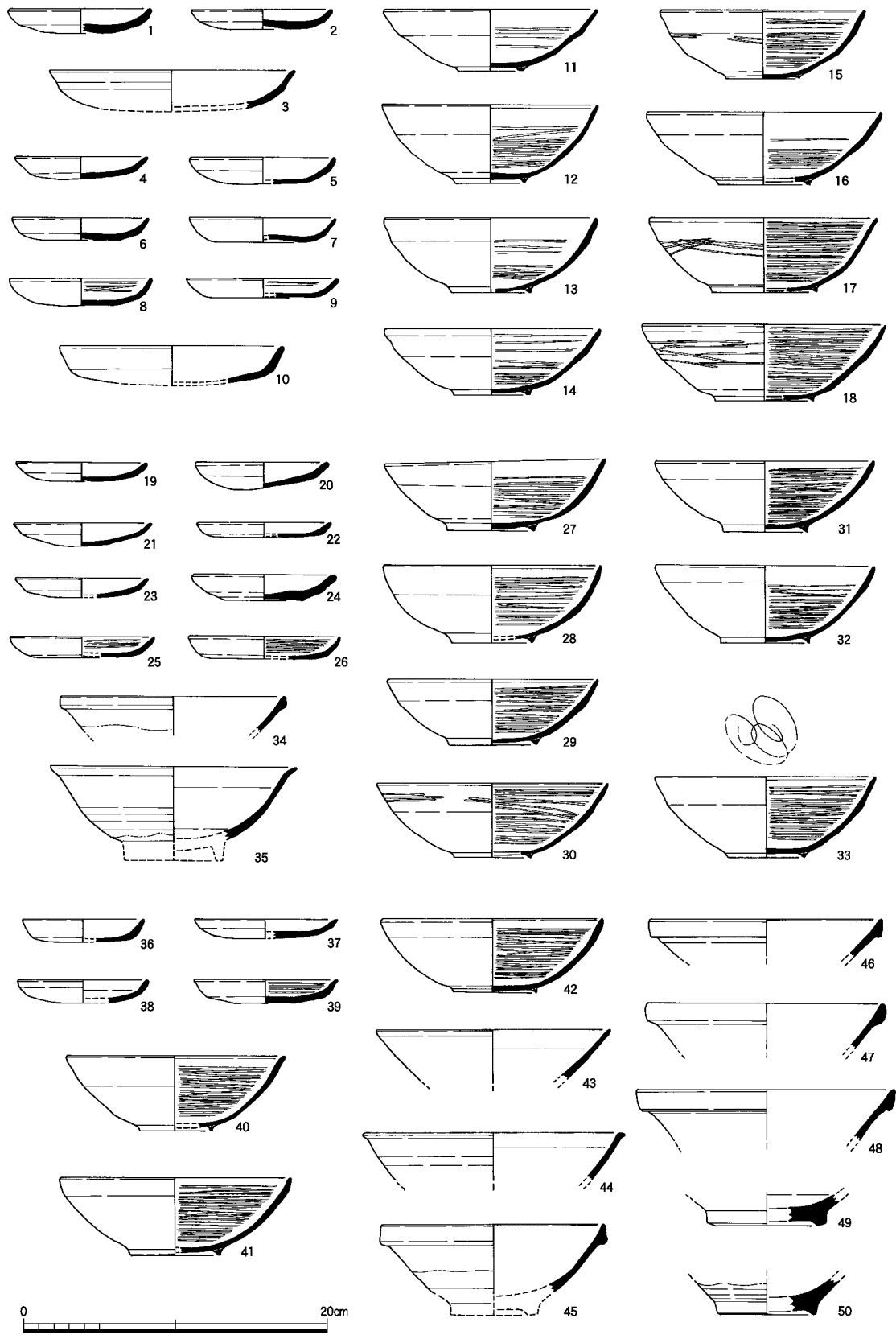


图13 2区出土中世遺物実測図(1:4)

2) 長岡京期の遺物 (図14~18、図版23~25)

長岡京期の遺物が出土する遺構は、一条条間南小路南側溝SD532、北側溝SD533、SD533から北に延びるSD543、井戸状遺構であるSK542、土器廃棄土壌であるSK563、SK563の東に平行する南北に長い土壌SK567、そして2区北端で検出した2条の平行する東西溝SD552・553である。このうち、SK563とSD543から一括して廃棄された状況で多くの遺物が出土した。これらの遺物群について以下に報告する。

遺物の種類は土器類が圧倒的な比率を占めており、ミニチュア竈や土馬など祭祀的な性格をもつ土製品も若干土器類と共伴して出土する。また、微量ではあるが瓦類が出土するのは注目できる。軒瓦の出土はみられないが、2区の上記の遺構や包含層から長岡京期の瓦類(丸瓦19点・平瓦19点)が出土している。出土量が極端に少なく破片として散発的に出土することから、屋根瓦としての使用は考えられず、整地など京の造営事業に伴って搬入されたものと推定できる。

SK563出土土器

SK563から出土した遺物は破片数にして2,423点である。そのうち2,315点が土師器であり、全体の95.5%を占めることになる。黒色土器は24点、須恵器は84点となっており、出土比率にするとそれぞれ1.0%と3.5%にすぎない。

土師器では皿A・皿C・杯A・杯B・椀A・高杯・壺B・甕・羽釜・製塩土器・竈が出土している。また、祭祀的性格を帯びるミニチュア土器も出土している。これらの破片数を用途別の比

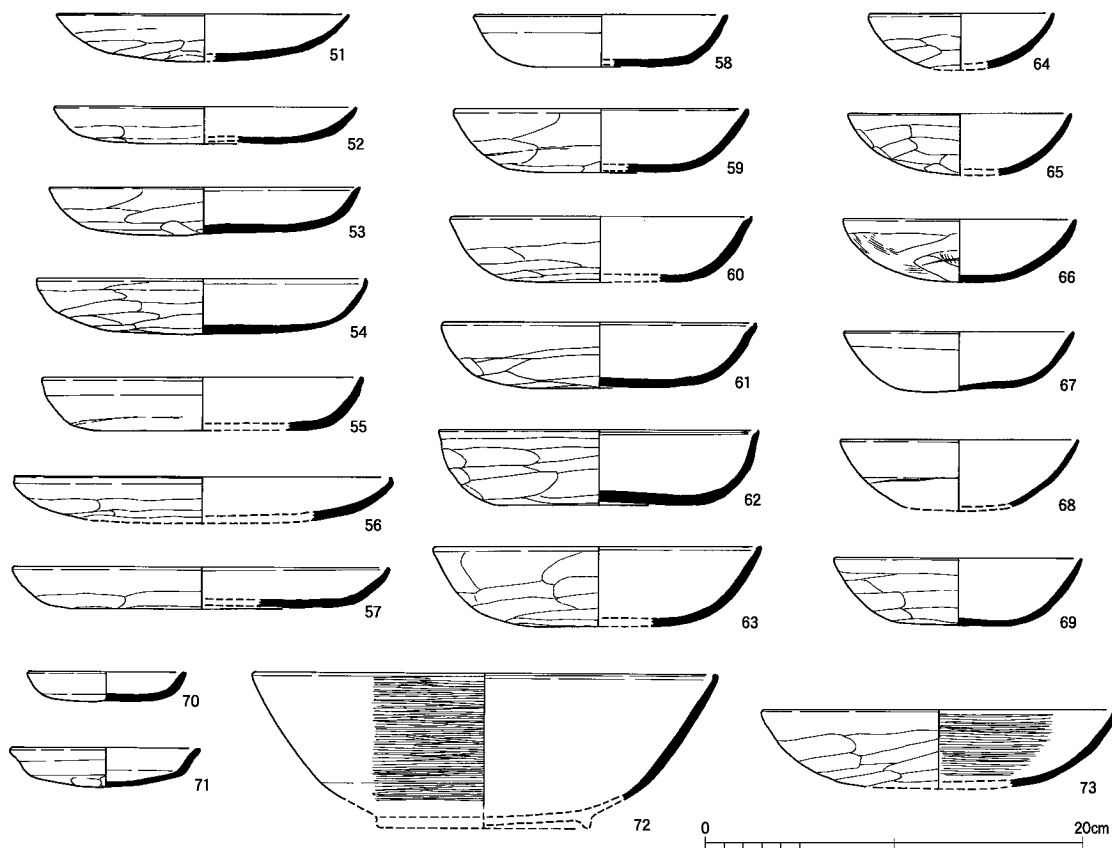


図14 2区SK563出土遺物実測図(1:4)

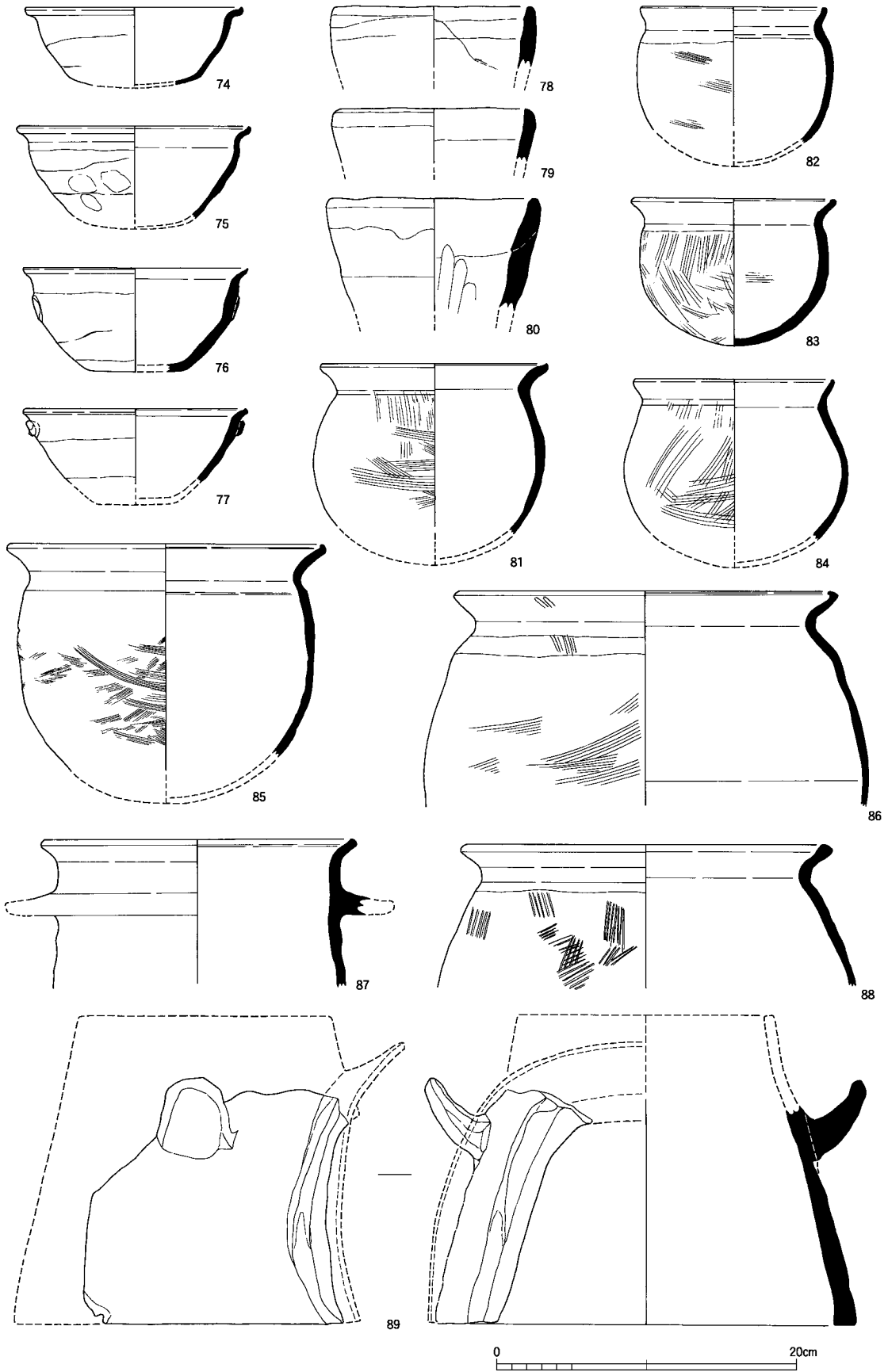


图15 2区SK563·567出土遺物実測図(1:4)

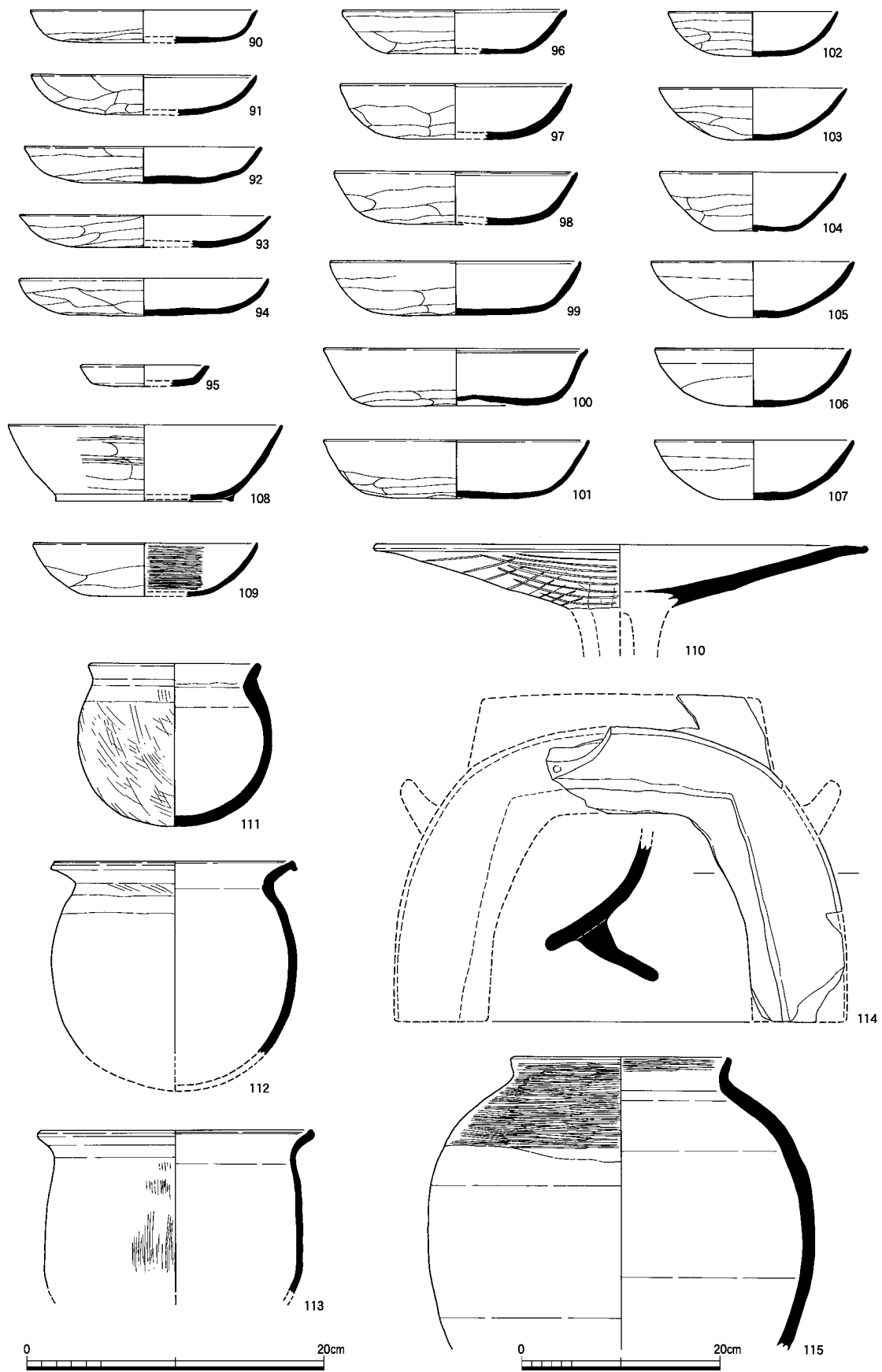


図16 2区SD543出土遺物実測図(1:4、115のみ1:6)

率でみると、杯皿類と高杯・盤をあわせた供膳形態の土器は1,281点で全体の55.3%を占めており、甕や鍋などの煮沸形態の土器は547点と全体の23.6%となる。また、製塩土器は55点と全体の2.4%出土しており、祭祀土器であるミニチュア土器と壺Bは73点と全体の3.2%と、共に相対的に高い比率で出土しているのが特徴的である。

土師器の供膳形態を観察すると、皿A（51～57）は口径16cm前後のもの（51～53）と17.5cmのもの（54・55）20cmのやや大型のもの（56・57）に分かれる。杯A（58～63）は大きくみて、口径16cm前後のもの（59～61）と17cm強のもの（62・63）に分かれ、資料（58）のように口径13.5cmの小型のものも認められる。椀A（64～69）はほとんどが口径12～13cmにおさまるが、やはり口径10cmの小型のもの（64）が1点出土している。

これらの外面調整は外面へラ削りによるC手法を主体とするが、口縁部のへラ削りが粗く底部から体部下半にかけてしかへラ削りが確認できないもの（51・52・56・57・60・61・64・66）も多い。また、口縁部にナデ調整を施すだけで体部外面から底部にかけて未調整のe手法のもの（55・58・67・68）もある。これら外面調整が粗い資料あるいは未調整の資料では、成形時に粘土を左巻きに巻き上げた痕跡が体部外面に残っている（51・55・59・61・66・68）。

口縁端部の形態で分析すると、皿Aは丸くおさめるもの（51・52・55）、内傾する面をもつもの（53）、内側に若干肥厚させるもの（54・56・57）がある。杯Aは口縁端部は内側に肥厚させるのが一般的であるが、口縁の外反を強調して有段ぎみに細く上方に突出させる資料（60・62）も見られる。椀Aの観察資料はすべて丸くおさめている。この他、小型の皿C（70・71）は口縁が外反して端部を丸くおさめる。底部外面は未調整である。杯B（72）は口径約25cmの大型のもので、体部外面を丁寧に横へラ磨きしており、口縁部は内側に肥厚させる。高杯は面取りした脚部の破片が若干出土する程度で、資料化できるものはない。

煮沸形態の土器は甕（81～86）と羽釜（87）がある。甕は口径が13～15cmの小型のもの（81～84）と約21cmの中型のもの（85）、25cmを越える大型のもの（86）に分かれる。ほとんどの資料が体部外面に被熱痕跡を残すが、資料（83）は全く熱を受けた痕跡がない。調整は体部外面は刷毛による調整後にナデ調整を施すが、ナデ調整は粗く広範囲にわたって刷毛目痕跡が残る。屈曲した口縁部は横ナデ調整で、端部を内側に若干肥厚させる例が多い。資料（83）では口縁内面から体部内面にも横刷毛の痕跡が残っている。また大型甕である（86）では、口縁屈曲部に第1次成形時の叩きの痕跡が外面に残っており、口縁端部の内側への肥厚も屈曲気味になっている。羽釜（87）は鏝部を貼り付けた後に丁寧な横ナデ調整で内外面を仕上げている。外反する口縁の端部は内側に肥厚させる。なお、手づくね成形の把手が付いた移動式甕の右側部破片（89）が出土している。

特殊形態の土器として製塩土器（78）がある。口径約13.5cmで、器壁が厚く口縁端部は内湾ぎみに丸くおさめる。内外面は指圧痕跡を残す粗いナデ調整で、粘土紐巻き上げ痕跡を残す。胎土に砂粒を多く含んでおり、他の土器と明瞭に区別が可能である。同様の製塩土器破片は多く出土したが、ほとんど細片化していた。SK563の東で検出したSK567からも同型式の製塩土器が出土

しており、SK567出土資料の実測図を参考資料として掲載しておく（79・80）。

また、祭祀関係の土器として壺B（74～76）、ミニチュア鍋（129・130）、ミニチュア竈（132・133）がまとまって出土している。壺Bは口径15cm前後で、頸部から肩部のしまりがなく、口縁部は強く外反して端部を上方に肥厚させる。口縁部から内面は横ナデ調整で仕上げるが、体部外面は指圧痕跡を残し未調整である。左巻きに粘土を巻き上げた痕跡が外面に明瞭に残っており、体部下半にも継ぎ目を指押さえて消した痕跡が認められる。資料（76）では肩部に粘土塊が貼り付けられており、同様の資料はSK567からも出土する（77）。ミニチュア鍋および竈は左巻きに巻き上げて成形し、内面ナデ調整・外面指押さえを基本とする。ミニチュア鍋は口径約7cmの手づくね土器である。（129）の粘土巻き上げ痕跡は明瞭でないが、内面底部が意図的に指で窪められている。ミニチュア竈（132・133）は焚口部を切り取り、周囲に廂の粘土を貼り付けナデで成形し仕上げるようである。

なお、土器ではないが、祭祀関係の土製品として、土馬（134・135）もこれらと共伴して出土している。資料（134）は左前足以外の脚部を欠損するが、他は完存する。体部は粘土板を折り曲げて頸部・四肢・尾部を成形し、顔部を別粘土で頸部に挟み込んで成形する、当該期に一般的ないわゆる「都城型」土馬である。頭部は三日月形に成形し、頂部を意図的に軽く前方へ折り曲げている。目は竹管押圧で表現し、耳は下方に取り付けるため手綱状に形骸化している。体部は裸馬で馬具の表現は全くなされていない。同型式の土馬頭部破片がSD552（136）と一条条間南側溝SD532（137）からも出土している。

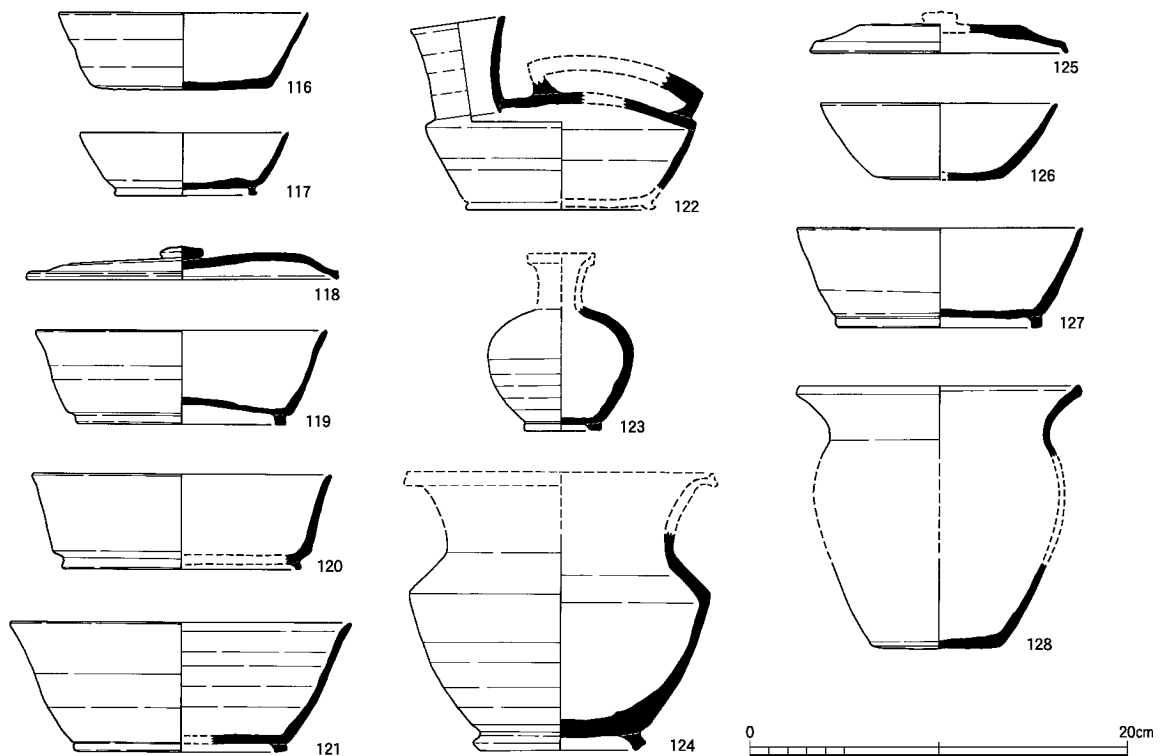


図17 2区SK563・SD543出土遺物実測図（1：4）

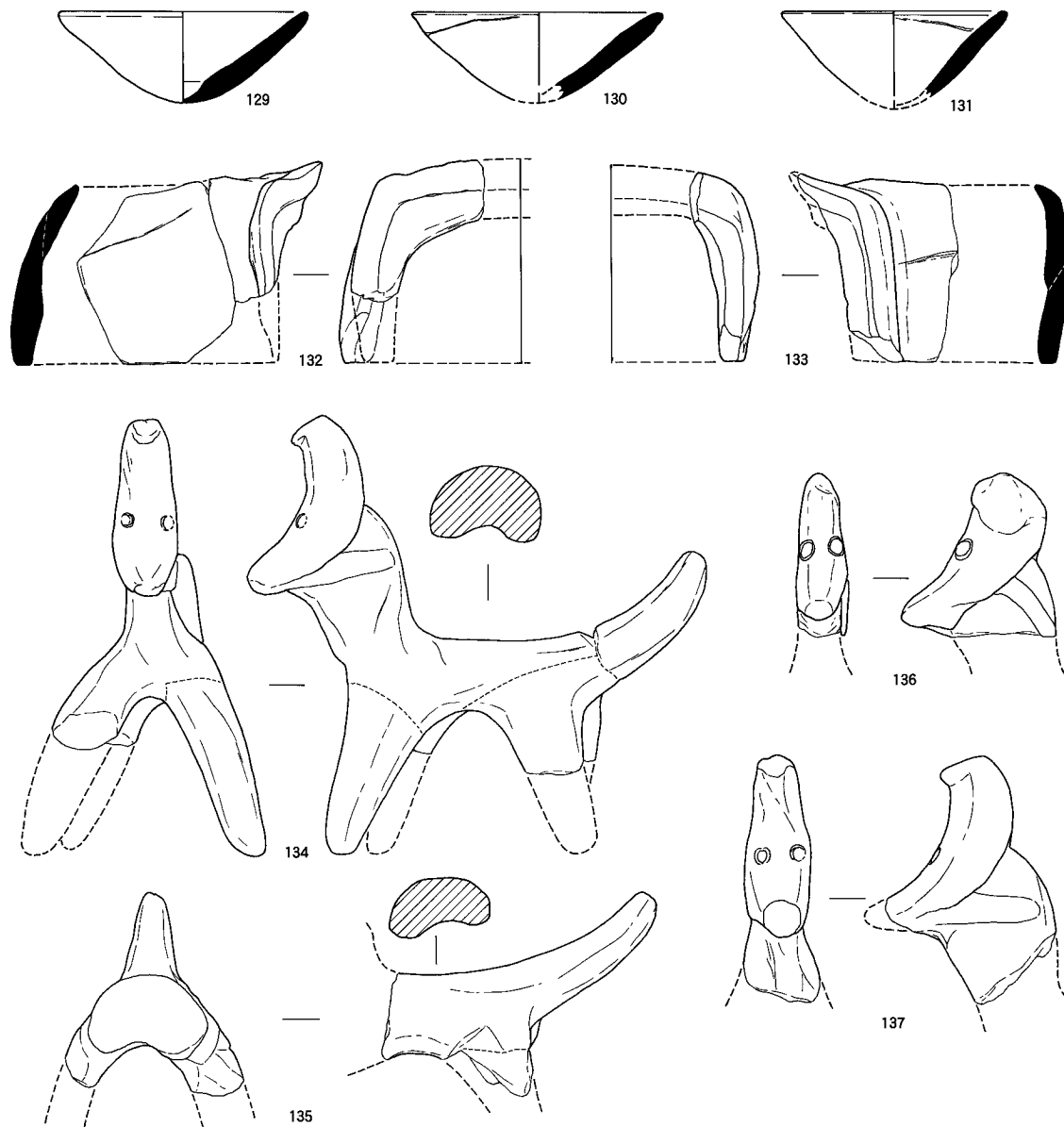


図18 2区出土ミニチュア土器・土馬実測図(1:2)

黒色土器では杯Aと甕が出土している。杯A(73)は黒色土器A類で、丸く端部をおさめた口縁から内面にかけて黒色化がなされている。調整は内面が丁寧な横ヘラ磨き調整で、外面はヘラ削り調整である。甕(88)は外面から口縁内面にかけて黒色化している。体部外面は平行叩き成形後に粗くナデ調整を施しており、口縁部は横ナデ調整で第1次成形時の平行叩き痕跡が外面に残っている。口縁端部は内側の肥厚が大きいのが特徴的である。

須恵器では杯A・杯B・杯蓋・平瓶・壺M・壺Hが出土している。杯A(116)は平らな底部から直線的に体部が立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。他の須恵器と比べて焼成が甘く軟質である。杯B(117・119~121)は口径約11cmのもの(117)と口径約15.5~16cmのもの(119・120)、口径約18cmの大型のもの(121)に分かれる。口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめる。杯蓋(118)は口径16.4cmで宝珠形の平らな摘みがつく。この資料はSD552出土資料と接合して

おり、両遺構の遺物がほぼ同時に廃棄されたことを示唆している。杯類はすべて回転成形で、底部外面および杯蓋天井部に回転ヘラ切りの痕跡を残す。平瓶（122）は底部の形状は明らかでないが、やや小振りの体部頂面に把手と口縁部が直立ぎみに取りつく。壺M（123）は小型の壺で頸部から上が欠損する。体部下半部は回転ヘラ削り後にナデ調整を施しており、底部に低く安定した高台がつく。壺H（124）は肩部が強く張った広口の壺で、口縁部は欠損する。体部下半部は回転ヘラ削りで、底部に外に踏ん張った高台がつく。外面に一方から付着した自然釉がかかり、内面底部にも多量の灰をかぶっている。

SD543出土土器

SD543の出土状況は、北端部に集中しており、その他ではX=-117,136m付近（南地点）で若干まとまっているだけである。明らかに大半の遺物は北側から廃棄されたと考えられるが、後述する黒色土器壺は北端部と南地点の資料が接合しており、遺物が溝全体に同時廃棄されたことが想定できる。

SD543から出土した遺物は破片数にして2,556点である。そのうち2,427点が土師器であり、全体の94.9%を占める。黒色土器は38点で1.5%、須恵器は91点で3.6%となり、SK563とほぼ同じ比率となっている。器種構成もほぼ共通しているが、破片数からみた土師器の形態別比率が若干異なっている。杯皿類と高杯・盤を合わせた供膳形態の土器は1,891点で、土師器全体の77.9%を占めており、SK563に比べてかなり高い比率となっている。甕や鍋など、煮沸形態の土器は362点と全体の14.9%でやや低い。また、製塩土器は32点で1.3%、ミニチュア土器と壺Bは23点で1.0%と、共に低い比率である。

土師器の供膳形態は、皿A（90～94）は口径15～16cmのもの（90～92）と17cm前後のもの（93・94）に分かれ、杯A（96～101）も口径16cm前後のもの（96～98）と17～18cmのもの（99～101）に分かれる。椀A（102～107）も口径11.4cmの小型の椀（102）が少数みられる他は13

表3 長岡京期主要遺構出土遺物破片数

器種	器形	SK563			SD543			SK563・SD543		
		破片数	器種別%	器種比率	破片数	器種別%	器種比率	破片数	器種別%	器種比率
土師器	杯・皿	1,260	54.4	95.5	1,877	77.3	94.9	3,137	66.2	95.2
	高杯・盤	21	0.9		14	0.6		35	0.7	
	甕・釜	547	23.6		362	14.9		909	19.2	
	壺B	19	0.8		11	0.5		30	0.6	
	ミニチュア土器	54	2.4		12	0.5		66	1.4	
	製塩土器	55	2.4		32	1.3		87	1.8	
	不明	359	15.5		119	4.9		478	10.1	
合計	2,315	100.0		2,427	100.0		4,742	100.0		
須恵器	杯・皿	62	73.8	3.5	61	67.0	3.6	123	70.3	3.5
	壺・鉢	15	17.9		19	20.9		34	19.4	
	甕	7	8.3		11	12.1		18	10.3	
	合計	84	100.0			91		100.0		
黒色土器	椀・皿	22	91.7	1.0	29	76.3	1.5	51	82.3	1.3
	壺	2	8.3		1	2.6		3	4.8	
	甕	0	0		8	21.1		8	12.9	
	合計	24	100.0			38		100.0		
土器総数		2,423		100.0	2,556		100.0	4,979		100.0

cm前後におさまっており（103～107）SK563での径高分布とほぼ共通する。調整も外面へラ削りによるC手法を主体とするが、へラ削りが粗い資料（90・96・97・99～104）も多く、e手法のもの（105～107）もある。これらの資料には成形時の粘土巻き上げ痕跡が体部外面に観察できる（99・102・105～107）。

口縁端部の形態もSK563と共通した分類が可能で、皿Aは丸くおさめるもの（92～94）、内傾する面をもつもの（90）、内側に若干肥厚させるもの（91）があり、杯Aは口縁端部を内側に肥厚させる資料とともに口縁の外反を強調して有段ぎみに細く上方に突出させる資料（97）が認められる。椀Aは丸くおさめるものが多いが、内側の肥厚を表現する資料（106）もある。この他、小型の皿C（95）は口縁が外反して端部を丸くおさめる。底部外面は未調整である。杯B（108）は口径約18.5cmで、体部外面はへラ削り調整後に粗い横へラ磨きを施す。底部には逆台形の低い高台を取り付ける。焼成が甘く軟質で橙色を呈する資料である。高杯（110）は復元口径が約33.5cmで、軽く外反した口縁端部は上方に弱く肥厚する。内面は丁寧なナデ調整、外面は外側へのへラ削り調整後に横へラ磨きを施し、面取りした脚部が取りつく。椀A（104）と皿C（95）のみが南地点出土で、他はすべて北端部から出土した。

煮沸形態の土器は甕（111～113）がある。甕は被熱痕跡が認められない12cm弱の小型のもの（111）と、被熱痕跡を残す中型のもの（112・113）に分かれる。中型甕も（112）は口縁端部を外側に肥厚させて胴部が張るが、（113）は口縁端部を内側に肥厚させて長胴の形態をとる。他の甕口縁部では内側に肥厚させるのが一般的な形態である。調整は口縁部は横ナデ調整で、体部外面は刷毛による調整後にナデを施すが、ナデ調整は粗く広範囲にわたって刷毛目痕跡が残る資料が多い。移動式竈は左側部破片（114）が出土している。なお、ミニチュア鍋・竈の破片や土馬の破片も出土するが、数量的には多くない。ミニチュア鍋（131）は粘土巻き上げ痕跡が内側に残っている。

黒色土器では杯A・杯Bと大型壺が出土している。杯A（109）は黒色土器A類で、丸く端部をおさめた口縁から内面にかけて黒色化がなされている。調整は内面が丁寧な横へラ磨き調整で、外面はへラ削り調整である。杯Bは底部のみの資料が1点出土している。黒色土器A類で、高台径約12.5cmのやや大型の杯である。断面方形の安定した高台がつき、内面底部には丁寧なへラ磨きとともに螺旋形の暗文が中心と四方に装飾的に施されている。壺（115）は口径約22.5cm、胴部最大径約39cmの大型壺で、口縁部から肩部外面にかけて丁寧な横へラ磨きを施し黒色化している。それ以下の体部外面はナデ調整で、焼成が甘く橙色を呈しており、一部火襴痕跡を残しにぶい橙色から桃色に変化している。非常に特殊な用途が想定される壺である。北端部と南地点の資料が接合しており、廃棄の一括性を示す資料である。

須恵器では杯A・杯B・杯蓋・壺Hが出土している。杯A（126）は平らな底部から上外方に体部が立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。杯B（127）は口径約15cmで、体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部には断面方形の安定した高台が取りつく。杯蓋（125）は小破片であるが、口径約13.5cmに復元できる。壺H（128）は肩部の張りが弱い広口の壺で、高

台はつかない。口縁部と体部下半から底部の破片で、焼成が甘く軟質である。これらの須恵器はすべて回転成形で、底部外面および杯蓋天井部に回転ヘラ切りの痕跡を残す。

3) 古墳時代以前の遺物(図12・19、図版26・27)

古墳時代以前の遺物はすべて下層の流路SD600から出土したものである。1区北端部から2区にかけて古墳時代以前の旧流路氾濫原として堆積しており、明確な遺構に伴う遺物はない。また、1区南端部でも流路が確認されており、若干の土器が出土している。調査区全体の遺物の出土状況をみると、1区を中心に古い遺物が出土し、2区の北端部では旧流路堆積が北に向かって上っており、この地点から弥生時代後期から古墳時代の土器群が多く出土している。これらの土器群の遺存状況は極めて良好で、付近に生活空間が存在したことを示唆している。ここでは、まず2区北端部から出土した土器群について報告を行い、南方から出土する古い遺物について順次報告する。

弥生時代後期から古墳時代の土器

2区北端部で確認した旧流路の立ち上がり部から出土した土器群である。旧流路の立ち上がりは西北西から東南東に斜行しており、土器群もこの斜行したラインに沿って面的に出土した。これらの土器群は流路底部に堆積したものと考えられ、堆積土の上層からは細片しか出土しない。出土した器種は壺・鉢・甕・高杯で、上層からは須恵器杯と土師器甕が出土した。以下、器形ごとに説明を加える。

(138)は短頸の無文広口壺である。体部外面に左上がりの細かい刷毛目調整が残り、肩部にも頸部に向かう刷毛目調整を施す。頸部も第1次調整は刷毛目だが、ナデ調整によってほとんど消されている。体部下1/3の位置に接合線が確認でき、その下もナデ調整によって縦方向の刷毛目をナデ消す。口縁部内面は横刷毛後に丁寧にナデ調整を施し、体部内面下半から底部にかけて指ナデで仕上げるが体部内面上半から肩部内面にかけては未調整で、粘土紐継ぎ目が明瞭に観察できる。(139)は端部が垂下した無文広口壺、(140)は長頸壺の口頸部である。両資料ともに頸部外面に縦磨きの痕跡が残る。(141)は長頸壺の下半部である。外面には斜め方向の磨きが施されているが、内面はナデ調整だが体部上半と下半の接合線が確認でき、接合時の爪の痕跡も残る。(142)は二重口縁を持つ飾り壺である。他の壺がにぶい黄橙色や褐黄色を呈するのに対し、明赤褐色に意図的に焼成されている。口縁上半は大きく外反し、下端部に竹管文が施される。また、肩部と頸部の境に刻み目突帯がつく。外面の調整は細かい刷毛調整後にヘラ磨きを施すようである。(145)と(146)は受け口状の口縁を持つ近江系の広口壺である。立ち上がった口縁部の外面下半部に刺突列点文を巡らせ、(145)では肩部にも直線文と刺突列点文を巡らせている。(146)では口縁部の刺突列点文だけでなく屈曲部にも刻み目を巡らせている。口縁部の調整はナデ調整であるが、頸部外面の第1次調整は刷毛目調整で、内面も板ナデの痕跡が残る。

(143)と(144)は鉢形土器である。(143)は体部に縦方向の刷毛目を施し、内面をヘラ削りして薄く仕上げている。強く屈曲した口縁部はナデ調整で、端部を内外面に弱く肥厚させるため、

断面が若干撥形になっている。(144)は内外面をナデ調整で仕上げた小型の鉢で、底部外面には木葉圧痕が残る。口縁部の屈曲は弱く、端部を上方に若干肥厚させる。体部外面に粘土巻き上げ痕跡が観察できる。

甕形土器は口縁部が「く」の字状に強く屈曲するタイプ(149)と受け口状口縁をもつタイプ(148)に分かれる。(149)は体部上半と下半を接合して成形しており、上半部は平行叩きによる右上がりの叩き締め円弧を描く。下半部も平行叩きによって成形されているが、上半部の叩きによって接合部の叩き痕跡は切られている。体部内面はナデ調整が施されるが、やはり接合痕跡が残っている。肩部外面は細かい刷毛目調整が施され、内面は上げ気味の横ヘラ削りで薄く仕上げられる。口縁部はナデ調整で、端部内外面を肥厚させるため断面が撥形を呈する。(148)は口縁部の形態が受け口状となる無文の甕である。体部外面の平行叩きの様相や内面のヘラ削りなど、資料(149)と強い共通性が認められる。口縁部はナデ調整で仕上げられており、受け口の立ち上がりが短く外反するのが特徴的である。形式的には新しい属性であろう。近江系甕である(147)は口縁部の外面下半部に刺突列点文と刻み目を巡らし、肩部にも直線文と2列1組の刺突列点文を巡らせている。壺(145)と文様様式に共通性が強い。口縁部の調整はナデ調整で、頸部外面の第1次調整は刷毛目調整である。(150)は底部穿孔の小型甕である。被熱のため外面剥離が激しく調整痕跡があまり確認できないが、体部は下から縦方向のヘラ削りが施されている。口縁部は強く屈曲し、内側をヘラナデで上げるため端部が上方に肥厚する。体部内面には板状工具のあたりが若干残っており、第1次調整でヘラによるナデ調整が施されているが、後の丁寧な指ナデ調整でこれらの痕跡が消されている。底部穿孔は焼成後の2次的穿孔であり、弥生時代中期後半にさかのぼる土器である。この他、脚台付き土器と考えられる資料(151)が出土している。脚部外面は縦磨きが施され、体部下端は刷毛目調整である。器形的には甕と鉢が考えられるが、底部内面を刷毛調整後にヘラ削りとナデ調整で丁寧に仕上げられており、鉢形土器になる可能性が高い。

高杯は杯部が緩やかに立ち上がり、屈折して外反する短い口縁をもつ資料(153・154)がある。(153)は杯体部外面から脚部にかけて粗い縦方向の刷毛目を施しており、口縁屈曲部は横方向の刷毛目、口縁部は斜め方向の刷毛目を施す。杯部内面は口縁部が横方向の刷毛目、底部は放射状の刷毛目で装飾する。これらの粗い刷毛目調整は明らかに磨きを意識して施されたものと考えられる。脚部には四方に円形透かしが施され、脚部内面下端部にも刷毛目調整が及ぶ。(154)はやや大型の高杯である。(153)と比べて脚部が筒状になっており、外面調整も杯部から脚部にかけて縦方向のヘラ磨きである。脚部穿孔の透かしは確認できない。杯部内面の調整もナデ調整は確認できるが、最終調整の磨きなどは器面が荒れており不明である。脚部内面には芯棒に粘土を巻き付けて成形した痕跡が認められる。これらの資料が古い様相をもっているのに対し、(155)は形式的に新しいと考えられる資料である。平坦な杯底部から稜をなして上外方に直線的に口縁が立ち上がる。器面が荒れているため調整は不明だが、杯部外面下半にヘラ削り見られる横方向の砂粒の移動が確認できる。この他、筒状の脚部をもち裾部は短くラップ状に広がる資料(152)がある。裾端部は上方に肥厚させ、若干めくれ上がるような形状を呈する。脚部には三方に円形透

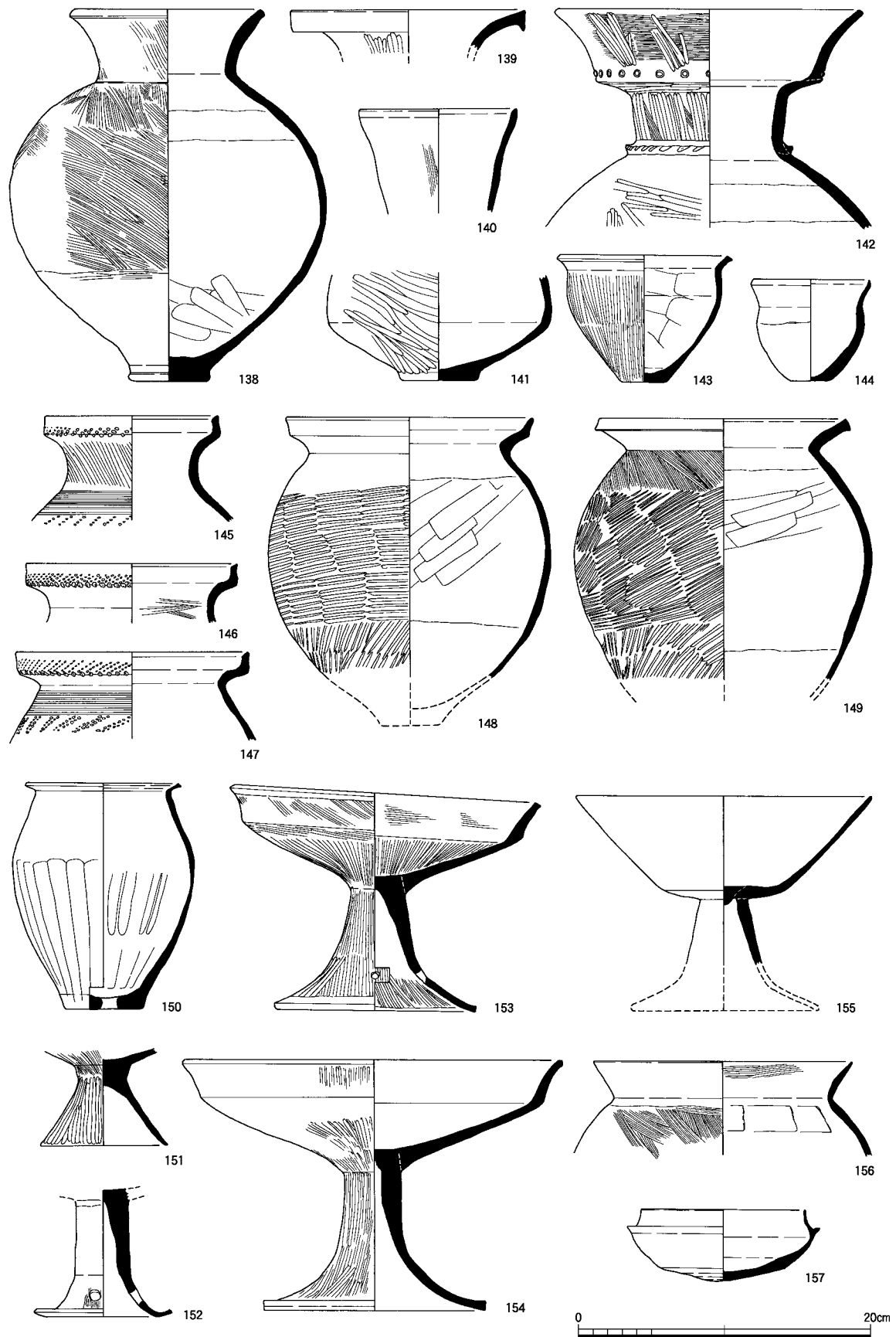


图19 2区SD600出土遺物実測図(1:4)

かしを配し、裾部外面には刷毛目調整が施されている。明瞭には確認できないが、脚部外面には縦方向の磨きが施されている。

上層から出土する遺物は細片が多いが、図示できる資料として土師器甕と須恵器杯がある。土師器甕（156）は体部外面を刷毛目調整、内面を横方向に板ナデを施している。屈曲した口縁部内面には横方向の刷毛目痕跡が残り、薄く仕上げた端部は丸くおさめている。須恵器杯H（157）はほぼ完形で出土した。口縁径11.2cm、最大径13.3cmで、口縁部は外反内傾して約1.5cmほど立ち上がり端部は丸くおさめている。内面の杯身部から口縁部への転換はなだらかで、明確な変化線は認められない。回転ナデ成形で、底部外面は直径約9cmの範囲で回転ヘラ削りを施す。

以上、流路出土の資料を観察したが、遺構の性格上同時期に廃棄された資料とは考えられない。流路下層の土器群でも最も古い様相の土器は弥生時代中期後半（ 様式）の底部穿孔甕（150）が出土しており、弥生時代後期（ 様式）の属性をもつ壺（139～141・145・146）、甕（147・151）、高杯（152～154）と、いわゆる庄内式から布留式の早い段階に属すると考えられる壺（138・142）、鉢（143・144）、甕（148・149）、高杯（155）があり、かなりの時期幅を想定せざるを得ない。弥生時代後期から古墳時代前期にかけての生活空間が、当調査区北側の安定した河岸段丘上に存在したことを示唆している。また、須恵器杯H（157）および土師器甕（156）の出土は6世紀段階までこの流路が機能していたことを示しているといえる。

縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物

縄文時代晩期の土器は船橋式の深鉢（161）が2区南端部の流路上層から出土している。復元口径約28cmの大型の土器で、口縁部と肩部に刻み目突帯文を巡らしている。成形は粘土紐を内傾に巻き上げ、突帯文を貼り付けて施文する。刻み目突帯文土器は少量ではあるが、調査区全体の広い範囲で破片が出土している。

5.まとめ

縄文時代後期から近代に至る長期間にわたる各種の遺構・遺物が発見され、多くの成果をあげているが、ここでは中世と長岡京期の遺構を中心に課題を整理しておく。

(1) 中世の集落の成立と耕作地化

中世の集落

遺構の大半は平安時代後期から鎌倉時代前期で、歴年代では12世紀から13世紀代にあたる。建物群は大きく東西の2群に分かれることから、2期の変遷を考えているが、問題はSB05の取り扱いである。東群の建物がいずれも東に傾くことから、SB05を1期に先行すると考えることもでき、また、3期とすることもできる。ここでは、SB05の柱穴に根石があり、構造がしっかりしていることから、SB05を単独で第1期とし、SB01・03とSC01の群を第2期、SB02・04とSC02を第3期とする。

このように建物群の変遷を考え、土壌SK37を土壌墓とすると建物群との関係が問題となる。出土遺物でみると土壌と建物の年代はほぼ重なることがわかり、集落内に墓が並存する状況が判断され、屋敷墓かと推定される。

また、トレンチ北側の約3度北で東に傾く条里を石見条里の北界線とし、集落の道路を想定すると、そこから集落南端の柵列までは20m弱しかないので、ここに道路は想定できない可能性が高く、石見条里の成立が問題となる。1区の調査成果では13世紀後半に現在の水田景観が成立したことがわかり、この成果が2区まで普遍化できるとすると、集落はそれ以前の景観を伝えているものと考えられ、集落の廃絶の後、ほどなくして現在の景観が成立したことが想定できる。

水田区画の変遷

1区では5枚の水田が耕作されていた。仮に南の水田を1として順に北まで番号を振り、検出した小溝などの遺構を手掛かりとしてその関係をみってみる。

2 水田の南側は、石見条里の南界線であるが、調査できなかった。

3 水田の南側畦畔は、石見条里南界線の約28m北に位置し、現代の幹線用水路が存在している。西拡張区の調査では当該部分で、13世紀後半の幅2m以上の溝と畦、SD390とSX147を検出している。1区北の関係部分では遺構面が削平されて、その東への展開は不明であるが、古くはこの部分に幹線用水路が存在したと判断できる。現状ではB水田南畦は5m弱と格段に広い畦畔で、当初は遺構検出の位置から判断すると、北側を使い、次第に南側に移動し、現在に至ったものと判断される。この鎌倉時代の水田(図20-A水田)は小溝が南北方向に掘られていたが、後に東西方向に掘り変えられている。1区北の調査区では東西方向だけが検出できたが、先に述べたように上層が削平されているため、本来は小溝の方向に2時期あったことが予想される。これに対して、B水田は東西方向の耕作溝が継続していたことがわかる。

4 水田の南畦相当部では、調査で畦畔と並行する用水の小溝を検出した。溝の成立時期は13

世紀後半である。

5 水田南畦畔は、近代の溝状遺構があり、削平されて中世の明確な畦畔や用水溝などは検出できなかった。

このようにみてくると、畦畔・用水路・小溝を伴う水田開発が13世紀後半に行われたことがわかり、その区画が現在まで続いてきたことが知られる。長岡京域では2,000次近い調査が行われているが、現存する水田が何時の時代まで遡るかについては良好な調査事例がなく、今度関係するデータの収集を積極的に行い、私たちが日常目にする景観がどのようにして成立してきたのかを提示していくことが重要である。

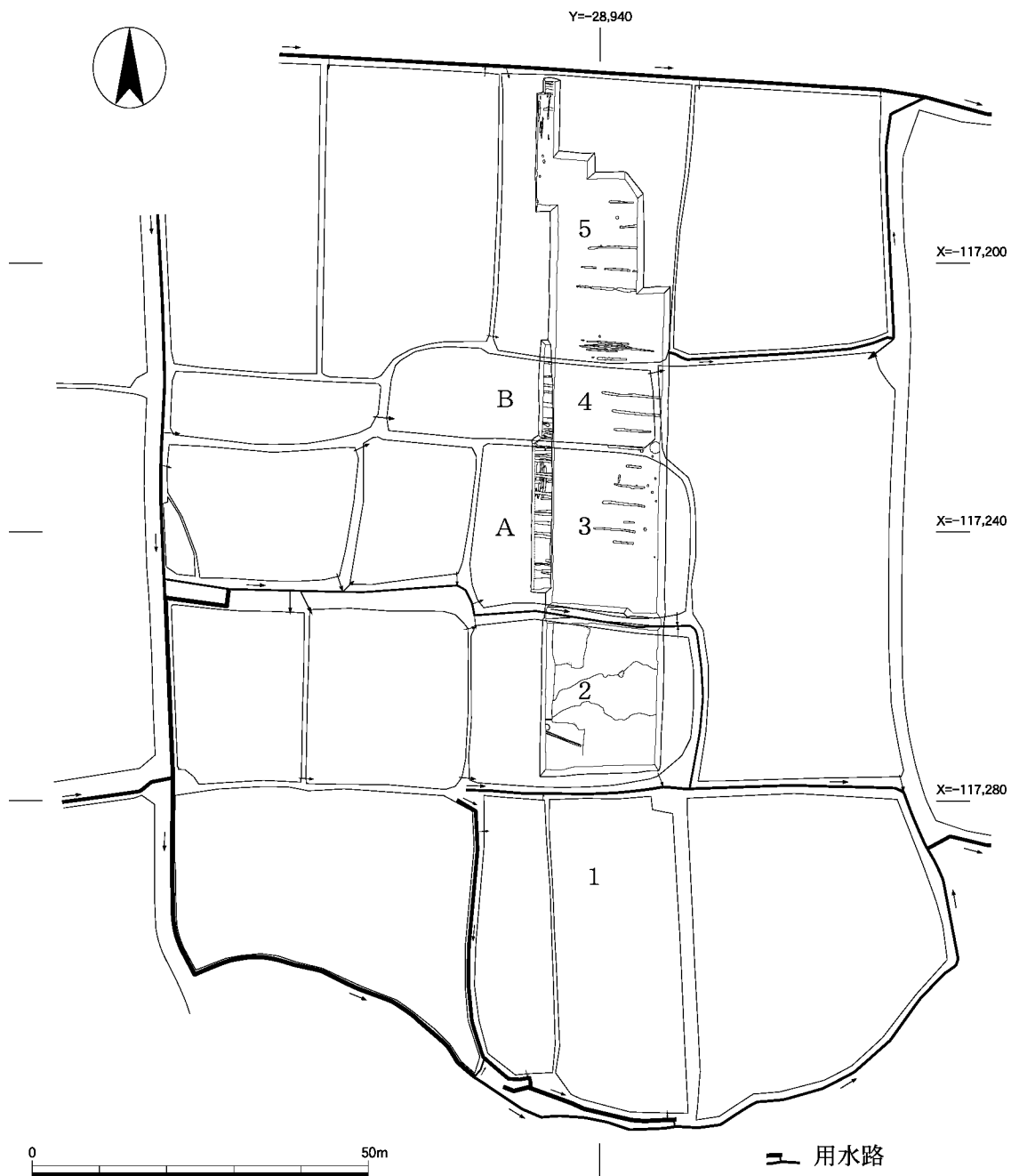


図20 1区検出の耕作溝と水田畦畔（1：1,000）

(2) 長岡京期の遺構

一条条間南小路

西京極に近接した地点での調査であったが、一条条間南小路両側溝の検出は大きな成果であった。右京ではこの道路に直接関係する条坊遺構が検出されていないので、左京で調査されたデータを使い施工精度をみってみる。長岡宮第164・249、左京第260・342・457次調査で北側溝が、左京第185・260・342次調査で南側溝が検出されている。両側溝が調査された左京第260次調査では、北側溝は $X=-117,141.06\text{m}$ 、南側溝は $X=-117,151.14\text{m}$ で検出されており、溝心で測ると道路幅は 10.08m となり、右京第746次調査の成果である 8.4m と比べると 1.6m ほど広い。

国土座標値で相互の関係をみると、北側溝のX座標値は $X=-117,141.06\text{m}$ で検出されており、今回の $X=-117,143.6\text{m}$ と比べると 2.5m ほど北に位置する。これに対し南側溝は $X=-117,151.14\text{m}$ で検出されており、 $X=-117.151.9\text{m}$ とほぼ同位置にくる。このように南側溝はほぼ同一数値で、間にある長岡丘陵を越えて正確に測量が行われたことが知られる。

側溝の構造をみると、南側溝には2時期の変遷はあるが、その幅や深さなど、規模が一定であるのに対し、北側溝はトレンチ内でも異なり、北側から直角に流れ込む溝が存在するなど、複雑な構造で、左京・右京共に南側溝を基軸に割付をした結果が想定できる可能性がある。

短期間の都(784~794年)であった長岡京の完成度については、調査を重ねるごとに各地で遺構が検出され、ほぼ完成されていたことがわかってきた。西京極に近接する地点で、かつ小盆地的な景観を有する大原野石見での発見は、西京極にいたるまで完成された部分がある都城であることを実証したものである。

(3) 出土遺物について

平安時代後期から鎌倉時代の遺物は、大半が2区北端の遺構群から出土している。特に、SK37とSB01に伴うと考えられるSK472から多量の瓦器・土師器が出土しているが、形式的にはほぼ同時期に属する遺物である。SK472からは焼壁片も出土しており、当該建物が火災を受けた可能性を示唆している。この他、建物群の柱穴からも瓦器・土師器が少なからず出土しているが、柵列SC01から南では遺物の出土量が極端に少なくなっている。これらの事実は、柵列より北側が土器類を多く消費した中世集落の本体であり、柵列より南は耕作地であったことを裏付けるものである。なお、出土遺物は瓦器が主流をしめており、中国陶磁器の出土量は全体の比率ではかなり少ないといえる。

長岡京期の遺物は、2区で検出した一条条間南小路の側溝と、南北に並んだ遺構であるSD543・SK563、そして調査区北端の東西溝であるSD552からまとまって出土している。特に、大量の土器群が廃棄されていたSD543とSK563の遺物は、非常に一括性が高い資料といえる。両遺構から出土する遺物は大半が土師器であり、須恵器の出土量は若干少なく、黒色土器はわずかに出土するにすぎない。しかし、SD543から出土した大型の黒色土器短頸壺は非常に珍しい器種であり注目できる。この黒色土器短頸壺の出土地点は、SD543の北端と南端に分かれて廃棄されていた。

最も多く出土している土師器の器種構成を概観すると、椀・杯・皿とともに高杯が出土しており、付近での供膳形態の土器使用が想定できる。それとともに煮沸形態である小型甕類も多く認められるのが興味深い。さらに、SK563出土遺物を特徴づけるのは、祭祀関係の遺物群である。ミニチュア竈やミニチュア鍋が目立って出土しており、土馬の出土も認められる。また、人面墨書が施される例の多い外面未整形の壺Bや移動式竈も出土しており、特殊な用途に使用された土器群であることを示唆している。これらの土器群の様相から、長岡京期における当地での特殊な空間利用が想定できそうである。なお、SK563から出土した須恵器蓋とSD552から出土した須恵器蓋が接合しており、両遺構が同時期に廃棄されたことを示している。

長岡京期の遺構面の下層では、1区北端から2区北端にかけて大規模な流路（SD600）の痕跡を確認している。また、包含層からは縄文時代晩期から古墳時代にかけての遺物が出土している。古い土器は中央部に多く、縄文土器は刻み目突帯を施す晩期の船橋式土器が出土しており、ヘラ描き沈線文をもつ弥生時代前期の土器も出土する。ヘラ描き沈線文土器は1区南端の流路遺構SD205でも出土している。弥生時代後期から古墳時代の土器群は2区北端部で集中して出土しており、当時の流路の北肩付近であることを示唆している。特に庄内期の土器と古墳時代後期の土器は、ほぼ完形のもののみがまとまって出土しており、調査区北側の微高地に当該期の集落の存在が想定できそうである。

新設道路の建設は、北部や東部に対する延長が計画されており、今後の調査成果も加味して、本格的な検討を重ね、長岡京や前後の時代の景観に対する資料を蓄積し、豊かな地域史を構築していく、その第1歩としてゆきたい。

註

- 1) 『京都市遺跡地図』平成8年版 1996年では、京都市分として前方後円墳1基、方墳1基、円墳9基が示されている。しかし4基は水田にドットされ、中心をなす前方後円墳は西へ200mずれた位置に示されている。
- 2) 岩崎 誠「石見遺跡の紹介」『乙訓文化』31号 乙訓の文化遺産を守る会 1978年
- 3) 『長岡京跡右京第22・25次調査報告書 - 長岡京跡右京二条三坊二・七町、上里遺跡 - 』長岡京市埋蔵文化財調査報告書 第11集 (賤) 長岡京市埋蔵文化財センター 1997年
- 4) 福島克彦「石見城」『第6回企画展 京都の城、乙訓の城 よみがえる戦国の城郭 』大山崎歴史資料館 1998年、なお、この城の周囲には上里城・上羽城などがある。
- 5) 原口正三 他「日本古代・中世史の「実証」的課題 - 考古学・地理学からの提起とのかかわりで」『日本史研究』136号 1973年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょううきょういちじょうしぼうじゅうさん・じゅうよんちょうあと							
書名	長岡京右京一条四坊十三・十四町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-2							
編著者名	百瀬正恒・網 伸也							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょううきょう 長岡京右京 いちじょうしぼう 一条四坊 じゅうさん・じゅうよんちょうあと 十三・十四町跡	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおはらのいわみちよう 大原野石見町	26100		35度 04分 01秒	135度 41分 01秒	2002年8月 8日～2003 年2月28日	4,800m ²	道路新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長岡京右京 一条四坊 十三・十四町跡	都城	縄文時代後・晩期 弥生時代前・後期 古墳時代前期 飛鳥時代 長岡京期 平安時代後期 鎌倉時代前期 室町時代 近世	流路(縄文～古墳) 一条条間南小路・ 南側溝・北側溝 土塙、溝、柵列、 掘立柱建物、 柵列(長岡京期)、 柱穴、土塙墓、土塙、 耕作溝(中世～近世)	縄文土器、弥生土器、 土師器、黒色土器、 須恵器、灰釉陶器、 緑釉陶器、瓦器、輸入 陶磁器(白磁・青磁)、 丸瓦・平瓦、製塩土器、 ミニチュア土器、土馬、 石製品、銭貨	一条条間南小路の 両側溝を検出。			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-2
長岡京右京一条四坊十三・十四町跡

発行日 2003年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961